

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2019/5/14	留学報告会 「We became true blue」 留学先:ミドルテネシー州立大学 (アメリカ)	田盛 隆一郎さん 高橋 阿惟さん	埼玉大学教養学部3年 (GY9期生)	<p>今回お話しくださったのは、アメリカミドルテネシー州立大学に留学していらっしゃった、田盛隆一郎さんと高橋阿惟さんです。お二人の留学報告会のテーマは“ We became true blue ”、日本語で意識すると“自分の信念に忠実に”という意味でミドルテネシー州立大学が掲げている目標です。お二人の留学報告を聞いて、この信念を大切に10カ月という限られた期間を精いっぱい使い、充実した留学期間にする事ができたのであろうことが想像できました。今回は私なりに、お二人がどのようにして留学を充実させたかを分析し、自分の今後の留学にどのように生かすかを考えていきたいと思ひます。まず第一に、留学で学びたいことと身に付けたいと考えていることが大学を選ぶ段階から明確化されており、留学してからも気になったことに向き合い、積極的に学びにむかっていることが大切だとわかりました。お二人は自分たちが日本で学んでいる専門分野を学ぶということ以外にも、アメリカ南部に今もまだ残っている人種差別の問題について学ぶために、自ら南部のミドルテネシー州立大学への留学を決め、日々の生活の中からも様々なことを感じ、学ぼうとしていたことが伝わってきました。さらに勉強面以外でも現地の人とのかかわりを増やして行くために、スポーツや音楽など様々な活動に参加し、留学生同士のコミュニティを増やしていたことなど、自ら積極的に行動して、そこも留学を充実させるために重要なことだと感じました。次に、文化や生活、慣習の違いについて柔軟に対応する力をつけて、自分の夢や将来に向けて自己分析をしっかりと行うことも非常に重要なことだと感じました。伝統や宗教による生活の違いはもちろんですが、時間に対する感覚の違いや基準の違いによってルームメイトと対立したこともあったとお話ししていましたが、人間関係の構築の仕方に関わり方も日本と異なっていて戸惑ったというお話でした。しかしお二人は、ルームメイトと話し合いしっかりと基準点を確認することで対立を解消し、留学生同士の交流会などにも自発的に参加することで自分の人間関係の輪を広げ、学びの可能性を増やして行っていました。育った環境によっての違いは海外に行く上で必ず実感するものだと思いますが、そこでひるまずに柔軟性をもって受け入れていくことが自らの文化を受け入れてもらうという点においても大切なことだと思います。</p> <p>私は今年の夏から留学が決まっています。今まさに準備段階にあります。たくさんの不安はありますが、このように実際に留学を経験された先輩から聞く生のお話はとても貴重であると感じています。先輩たちからのアドバイスのように、能動的に学ぶ姿勢と違いを受け入れることのできる柔軟性を持ち、自分の留学目的とプランについてじっくりと向き合いながら、過ごしていきたいと思ひます。</p> <p style="text-align: right;">(10期生 祐川 千紗)</p>
2018/11/12	インターンシップ報告会 実施先:ECOSS:シッキム州 環境保全NGO(インド)	高木 望愛さん	埼玉大学教養学部3年 (GY8期生)	<p>今回の報告会ではGY8期生の高木望愛さんが発表してくださいました。高木さんはECOSS(シッキム州環境保全NGO)のインターンシップに夏休みを利用して参加されたそうです。インドのシッキム州はインドの中で一番人口の少ない地域で、首都はガントックです。2002年にビニール袋を禁止にした最初の州として知られるようになったそうで、環境に気を遣っています。また、自給自足を実践しており、独立性が強いのも特徴の一つだと感じました。インターン先のECOSSはエコツーリズムを推進し、環境や文化の保全を目標とした団体です。自然環境を活かした観光業と自然環境や文化の保全という面から、観光客の単価を上げて少人数で大きな利益を上げることが目標にしたそうです。そこで具体的な行動として、シッキムの魅力をまとめた映像をつくることと外国人からの目線でのホームステイ先の現状を調べることに決めたそうです。高木さんは5つの地域でホームステイを経験されたそうです。まず、訪れたのがChalamthamg villageでした。観光地巡りや伝統的な祭りへの参加、temi teaや竹製品といったその土地特有のものを扱ったりしたそうです。次に農業中心の自然豊かなLingee Paiyonglに行かれました。そこでは学校訪問やホームステイ先の調査、Organic farmingの見学をしたそうです。三つ目に訪問されたのが、Khecheodapalriでした。この場所では、プティアと呼ばれる民族の家庭に宿泊し、設備が5つの村の中で一番不十分だと感じたそうです。次にカンチェンジュンガが有名なYuksamlに行き、KCCという団体と関わったそうです。KCCは持ち物を入るときと出るときに確認し、ゴミが出ていないかを確認したり、ゴミを回収し、商品にリメイクして売却することで収入を得たりしているそうです。最後にシッキム初となる空港がオープンしたYaktenlに訪れたそうです。また唯一旅行代理店の方がいる地域で、整備や指導が行われていたそうです。この5つの地域を訪れた上で感じた改善点は①説明書きが必要であること、②道路と排気ガスの問題、③電気の不足、④低コストを求める観光客の存在だったそうです。特に④に関しては今回のインターン目的でもあったので、分析をされました。その中で、ホテル型、民泊型という2つのホームステイがあるように感じたそうです。特に民泊型が現地の方との距離感が近く、自分の目的と合っていると思ひ、民泊型の料金とサービスを向上させたいと思ったそうです。そこで気をつけなければならないのが現地人と観光客のパランスだと話してました。また、既存のWEBサイトを用い、魅力の発信も積極的に行う必要があると思ったそうです。最終的に改善点を伝え、正式には採用されなかったものの、作成した動画の素材を渡し今後活かしてほしい旨を伝えたそうです。目標をあらかじめ立て、実際に現地に行った際にその都度方向を確認し、必要であれば作り直して、より良いものを作り上げていくことが大事だと感じました。また、観光業を行っている発展途上国の現状を初めて知ることができ、特色は残しつつも、より良いものにするためにこれから考えていきたいと思ひました。</p> <p>(10期生 川野 満里奈)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2018/11/5	インターンシップ報告会 実施先: JICAインド事務所	佐藤 菜々さん	埼玉大学教養学部3年 (GY8期生)	<p>佐藤菜々さんはJICAインド事務所に8月から9月にかけてインターンをされました。佐藤さんは物流業界に興味があり、主にデリーメトロとバンガロールメトロでのアンケート調査や聞き込み活動を通して「デリーメトロは人々の生活改善にどのように貢献したかを考察する」というインターンの目標に向けて取り組まれていました。実際メトロが第3フェーズまでに拡大されているにもかかわらず、人口増加のせいなのか、道路混雑は解消されておらず、自動車登録数の増加から見ても、メトロ利用の促進が十分でないと感じたそうです。佐藤さんの調査及び提案について印象的だったのは、メトロそのものだけでなく、家から目的地までの交通インフラ全体を見ていた点です。調査から利用者の満足度に関して運賃以外は概ね良さそうだったことから、佐藤さんはファーストマイルとラストマイルの他の交通機関とのコネクティビティの不足に注目し、メトロ利用の促進のために、オートリキシャの活用方法について提案されていました。例えばアプリで予約を取れるようにする取り組みを広げたり、駅のすぐそばに乗り入れ場を設置したりするなどです。佐藤さんは物流業界に興味があるとおっしゃっていたので、着眼点がさすがだなと思いました。駅構内はとても安全に配慮されていて、身体チェックや荷物検査、監視カメラなどが充実しているようで、私のインドに対する危険なイメージとはかけ離れているようでした。しかし女性の利用者はまだまだ少ないということだったので、その原因や解決策を考えてみると面白いのかなと思いました。またインドのような発展途上国ではバランスを取ることが難しく、コンサルタントへの聞き込み調査では安全とそのためのコストのバランスが今後の課題であることが分かり、メトロ運営側への調査から運賃と運営のコストのバランスという課題があるということが分かったそうです。佐藤さんは運賃と運営コストに関して、運賃を下げるのは現実的ではないので、提案したようなもっと使いやすい交通インフラの整備ができれば、利用者も運賃に見合っていると判断し、満足度も上がるのではないかという意見を述べていました。今回のBBセミナーで、私は交通インフラはその国の経済活性化にとっても非常に重要な要素であるが、一つの交通機関を発達させるだけではなく、全体の利便性を向上させていかなければならないのだと感じました。また、佐藤さんは90人もの人にインタビューをしていてその方法も地理的特徴を考慮していたものだったので、労力を惜しまない、正確性に長けたとても素晴らしい調査だったのではないかと思います。私もインターンシップをする際には予備知識などを十分に蓄えて有効な活動ができるように尽力したいです。</p> <p style="text-align: right;">(10期生 竹ノ山菜緒)</p>
2018/10/31	インターンシップ報告会 実施先: v-sehsh(社会企業) インド	渡辺 夏菜子さん	埼玉大学教養学部3年 (GY8期生)	<p>今回の報告会では、インドのV-sheshという社会企業で3週間インターンシップを実施された、教養学部でGY8期の渡辺夏菜子さんのお話を聞くことができた。V-sheshは主にEmployment、Education for students、Disability inclusionの三つの活動をしている企業であり、障がい者の方の就労支援や聴覚障害を持った子供たちへの英語教育といった障がい者一人ひとりの能力向上のためのトレーニングのみではなく、障がい者の地位向上のための企業への働きかけなどの社会活動も行っている企業である。そのV-sheshにおいて渡辺さんは、元トレーニング生へトレーニング内容やその効果についてアンケートを実施することによって、V-sheshの今後の活動について再検討された。</p> <p>アンケート結果から考察できることとしては、トレーニング内容は就職活動を行う上では役に立つものであるが、実際に企業で働き昇格を目指していくためには基礎的なものばかりで、より発展したスキル習得のためのトレーニングが必要であるということであった。私はこれに関し、より発展したトレーニングを行うためには、教える側に高度なスキルが求められることは確実であると考えた。一般的なパソコンに関するスキルを有し、手話で会話ができるといったこと以外にも、英語教育やデジタルデバイス、ライフスキル向上の専門家に指導を依頼することも今後必要になってくるのではないだろうか。</p> <p>また、渡辺さんがインターンシップ中に訪問されたSt.Louis Institute for the Deaf and Blindは、聴覚障害を持った子供と視覚障害を持った子供がともに学んでいるインドで最初の、障がい者のための学校である。視覚障害を持った子への手話と、聴覚障害を持った子への口頭での解説が同時に行われているという教育現場を知り、なぜそのような現状になっているのかに関し疑問をおぼえた。日本では通常、聾学校、盲学校と分けられることが多く、そこで働く講師もそれぞれの専門に特化した方が多いからである。調べてみると、インドの障がい者教育の課題と、都市部と農村部の地域格差の実態が明らかになった。インドの一般の識字率は74%であるが、視覚障がい者の識字率は26%となっており、障害を持った方への教育環境や教育方法について未発達な部分がまだ多くあるということ、そして特に農村部では都市部に比べ識字率が二分の一ほどになってしまうなど教育に関しても地域格差が生じているという現状があることがわかった。今回渡辺さんのお話を聞き、インドの現状を改めて知ることができた。その状況に関し、私たち一人ひとりが正しい認識を持ち、なにをしていくべきかを考えることが今後よりいっそう求められていくのではないだろうか。(10期生 祐川千紗)</p> <p>参考文献 ADICアジア途上国障害情報センター <a href="http://adinfo.jp/india/education.html">http://adinfo.jp/india/education.html</a></p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2018/10/22	<p>インターシップ報告会            実施先: Darwin English Tutorial International(教育機関)            フィリピン・ネグロス島</p>	江連 佑華さん	埼玉大学教養学部3年 (GY8期生)	<p>今回のセミナーではフィリピンのネグロス島で、現地の語学学校に行かれた江連さんのお話を伺った。江連さんはこのインターンに行くに当たって、目的としたことを3つ挙げられた。1つ目は課題を解決する能力を向上させること、2つ目にお客様のニーズに答えることができるように力をつけること、3つ目にネグロス島の魅力を知る、ということだ。ネグロス島はリゾートがとても綺麗であり、マーケットが栄えているということ、休日に温泉に行ったなどを島の魅力として語られた。反面、島の山岳地帯の地方は観光産業が殆ど発達しておらず、そこでは貧困層が多いということであった。</p> <p>語学学校に行かれてこなした業務内容の中で一番強調されたのは、新プロジェクトを提案したことであった。親子留学で来ている子供に現地の子供と交流させるという内容だ。子供同士を交流させることにより、語学学校の生徒は実践的に英語を学ぶことができ、それにより生徒の親は子供の教育により効果を期待でき、現地の子供は日本の子供と交流することにより日本の文化を知ることができるという、3つの視点からの利点を挙げられた。プロジェクトが開始し、子供同士でボールを回し、名前を覚えながらアイスブレイクをするという試みをしたが、あまりうまくいかず、その後催したかくれんぼで、遊びを通して子供たちは仲良くなれたということだった。江連さんはその結果に対し、子供は他人の名前には興味を持っていないという点で、より子供の気持ちを考えたほうがよかったという気づきを得ていた。業務はその他にも、以前からあったプロジェクトである農業体験プロジェクトを日本人がいなくても運用できるように改善をしたり、マリンググズの貸し出しシステムで貸し出し状況が把握できていなかったことに対し、貸し出しノートを作ることで解決したり、授業の補佐をしたり、現地の問題解決にも力を尽くされた。インターンを振り返って、得られたことについて以下の3点を話された。インタビューの仕方や、タスクマネジメントの管理などのビジネススキルを身につけることができた。外国人と仕事をするという経験を得られた。ネグロス島の豊かな自然を感じることができ、さらに現地の人と交流をすることができた。以上である。</p> <p>このインターンシップ報告会を通じて私は、何か案を考えるときに、江連さんのように意識的に様々な視点から案を眺めてみるという方法は、その案がもたらす影響を考える上で非常に重要なことであるので今後参考にしていきたいと思った。また、4週間という短い期間でこれだけ多くのことを学べている江連さんを見て、自分から積極的に行動することの大切さを深く感じた。 (10期生 藤森正也)</p>
2018/10/8	<p>インターンシップ報告会            実施先: Defacto Institute            (独立研究所)            モンゴル</p>	中居 智子さん	埼玉大学教養学部3年 (GY8期生)	<p>今回のインターンシップ報告は、GY8期生の中居智子さんがおこなった。中居さんは、モンゴルにインターンに行った。モンゴルは、中国とロシアに挟まれた内陸国で、国土の5分の4が草原に覆われ、主要産業の鉱業や牧畜のほか、家畜と遊牧の文化が色濃く残る国である。1992年に民主化を果たしたため、民主主義の歴史がかなり浅い。2011年からの経済成長率は2桁を記録していたが、2016年には1%にまで減少した。この原因は、主に不安定な政治やビジネスにあり、これらは公共政策が関係している。モンゴルでは十分に政策が研究されていないのだ。ジャーナリズムに興味のある中居さんは、モンゴルのDefacto Institute(独立研究所)をインターン先に選んだ。De facto Instituteは、独立、非政府かつ非営利の団体である。前述したモンゴルの政治における問題に着目し、民主主義の促進、ガバナンス、自由市場経済などの研究を行い、効果的な公共政策への貢献を目指している。このインターンで中居さんが設定した目標は、①経済・政治問題の分析。市民に気づいてもらう。具体的解決案の提言。②政策立案者の現在の政策改善を助ける。③政府の説明責任を強め、市民社会への市民参加を促す。の3つである。モンゴルには、De facto Gazetteという新聞が存在する。現地の政治コメンテーターJargalsaikhan Dambadarjaaさんの記事などを掲載しており、モンゴル語版のほか、日本語版や英語版も出版されている。最近ではモンゴル国営航空の航空機内でも配られるなど、より多くの人の目に触れるようになっている新聞である。中居さんは、今回のインターンにおける最初の会議で、この日本語版の新聞や、発信方法について改善点を提案した。具体的には、新聞の最後にQRコードを設置、Twitterの有効活用、レイアウトの修正、人気のある記事の日本語修正などである。その他、モンゴルと日本の友好関係などの点から提案をしていくうちに、最終的には、週一回のペースで計4回、日本語版のコラムを担当することになった。中居さんは、ウランバートルの印象から日本とモンゴルのこれらについて幅広く4回にわたってコラムを執筆した。その他、インターンの後半では、オフィスで与えられる仕事だけでなく、自ら外へ出てブラックマーケットやゲル地区などを見て知見を深めたりすることでより充実したインターンとなった。このインターンを通して中居さんが学んだことは、まず、ジャーナリズムの核心的な存在意義に迫れたことだ。そのほか、何かを知ったり見るためには自ら積極的に動くことが大切だということ。また、モンゴルの都市部とその他の地域とでみられる格差や現状を目の当たりにしたことでも大きな財産となった。当初設定した目標と照らし合わせると、ジャーナリズムの現場をのぞけたり、Jargalの考えを身近で学べたこと、モンゴルの現状を広く知ることができたのは大きな収穫であった。</p> <p>この発表を聞いた身としても、このインターンがとても充実したものであることが分かった。インターン発表を終えて思うことは、発展途上のモンゴルにはまだまだ問題が山積みだということだ。都市には人口が過密し、さらに地方の遊牧民が都市部の人のような生活を求めて流入しては失敗し、貧困化する人が増えている。GYの主たる目的から考察しても、国内の格差は政治の改革や都市開発の問題と並行して対策すべき問題だろう。 (10期生 小宮廉)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2018/5/22	インターンシップ報告会 実施先:v-sehsh(社会企業) インド	佐藤 望さん 若山 真子さん	埼玉大学教育学部4年 (GY7期生)	<p>今回はGY7期生の佐藤望さんと若山真子さんにインドでおこなったインターンシップのお話をいただきました。佐藤さんと若山さんがインターンシップに行かれたのはv-sheshというインドのチェンナイにある職業紹介所です。もう少し詳しく説明すると、障がいをもっているけれども、仕事をしたいという志を抱く人々が自らの意志で職業選択をして活躍できる社会づくりを目指しているソーシャルビジネスをおこなう事業団体です。具体的には、就職のための職業トレーニングや就職後のサポート、英語などの教育、企業側への採用の促進などをおこなっています。また、この事業団体は”Inclusion”という考えを大切にしている、これは社会に生きる多様な人々が対等に生きる機会を得られる状態を指しています。佐藤さんと若山さんは、ソーシャルビジネスとインドの教育現場の現状を知ることを目的として様々な活動や体験をおこなわれてきました。全部で5つあります。1つめはv-sheshの建物の調査です。手すりがあるか、段差はどのくらいあるのかなど障がいを持っている方々の視点から、それらが利用しやすいかを調査したということでした。2つめは所得税の障がい者控除の日本語への翻訳。3つめは聾学校への訪問。この学校に通う生徒は英語習得の難しさを感じてはいるものの、就職に関してはポジティブな良いイメージをもっているということでした。4つめはJob Fairへの参加です。Job Fairでは仕事をするためのスキルはあるのに、障がいがあるために職につけなくて、v-sheshの仲介を希望している人々の応募を募ったそうです。最後はAmul(酪農協同組合)についての調査とプレゼンテーションです。</p> <p>私は佐藤さんと若山さんの発表を聞いて、まずは私も障がいをもつ人々の視点から物事を考えて、なにがどのくらい大変なのかを少しでも知って障がいのある人々が過ごしやすい環境を整えることや、心配りができるようになりたいと思いました。また、“Inclusion”という考え方が障がい者雇用において大切な考えであると知りました。最後に日本でもソーシャルビジネスとして持続的に障がい者の就職支援、就職後のサポートができるようになってほしいと思い、v-sheshから特に学ばせていただいた点だと感じました。(9期生 宮澤 真理)</p>
2018/4/13	インターンシップ報告会 実施先:日本工営株式会社 (JICA公募型インターンシップ) ミャンマー	香田 祥真さん	埼玉大学工学部 建設工学科 4年 (GY7期生)	<p>今回のBBセミナーではミャンマーの都市ヤンゴンでの街づくりに関わるインターンシップをされた香田祥真さんの話を伺いました。JICAの公募型インターンシップで、主に開発コンサルタントを行う日本工営での活動です。日本からの無償資金援助40億円でダゴン下水施設や新タケタ橋、ヤンゴン川の橋の整備などがなされています。建設現場での安全面を部門ごとにチェックしたり、フィールドスタディーとして下水管工事の際の坂の勾配を測る等の業務をされたそうです。香田さんは職業を理解し自己の適性を調べることに重きを置いて今回のインターンシップに臨んだそうですが、現場で現場の人の話を聞こうと日本工営やJICA、大使や建設現場など様々な職場に赴いたそうです。ここで大変興味深い二つの点について書かせていただきます。一つ目は、現地視察を通して感じた現地人の能力の話です。建設現場ではマークや記号だけでなく、ちゃんとした文字で示された標識が使われていたそうです。ミャンマーはダックリストの中でも最下位層に該当する発展途上国ですが、教育分野は進んでおり識字率は90パーセントにも上ります。建設やエネルギー系、土木系の専門的知識のない作業員がほとんどですが、ミャンマーでは義務教育がない代わりに、僧院がミャンマー国民の教育機関として機能しており、貧困層でも無料で教育を受けられる社会システムが出来上がっているためです。効率的な作業のためにも教育は重要だと感じました。二つ目は座学で学んできた知識や自分の知識と、現場でのリアリティのギャップについての話です。差別や迫害の対象となっているロヒンギャは、日本ではミャンマーの問題としてよく取り上げられています。しかしミャンマーには多くの民族があるため現地での認識としては数ある民族問題の一つに過ぎない、と聞いたものだったそうです。たしかに差別や迫害といった問題は改善すべきことですが、それが身近に存在してきたミャンマー人にとってはもはやそれは特別なことではなく、日本人との認識や価値観の違いを改めて感じました。また、あるミャンマーの駐在職員の方は一年前に家を買ってしままだに4日しか家で寝ていないほどの忙しさだそうです。たしかにハードワークであることは想像がつかますが、実態は想像を超えたものでした。香田さんは一か月という短い期間の中で多くの人々と関り、インタビューやイベント等に積極的に取り組むことで、発展途上国ミャンマーで働くということを一歩情報として学んでいました。経済的に勢いがある発展途上国では人々の生活の移り変わりも早く、私たちに情報が届くまでも実態は急速に変化しています。自分の将来を考える上でインターンシップは大きな刺激となり、またその現場のリアリティを感じることで自分のやりたい職業とは何かをより明確に考える契機になると感じました。(GY9期生 阿部淑乃)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2017/12/8	“About Indian Railways & My Life in Japan”	Ms. Singhal Jyoti	埼玉大学大学院理工学研究科 環境システム工学系専攻	<p>年内最後のBBセミナーは、現在埼玉大学博士課程で学んでいるインド出身のJyotiさん。Jyotiさんはインドの鉄道会社に勤めていた過去があり、そのため今回はインドの鉄道事情と日本で生活の2つを中心に話してくれました。インドの鉄道は合計16.5万mあり、またその駅の数も7100個も存在しています。毎日1.2万人の乗客が鉄道を利用し300万tの貨物が貨物列車によって運ばれています。現在インド内での電車のシェア率は35%以下ですが、インド政府は2032年までに50%にまで増やすと計画しているそうです。インドは世界中で鉄道関連の仕事に従事している人の数が137万人と大変多く、世界的に見ても7番目の多さといわれています。まだまだ改良の余地のあるインドだからこそ、鉄道会社は貨物列車と電車の両面で課題を抱えています。例えば、衛生面や安全性、またターミナルの整備や日本のように時間に正確に運航できるかなど、課題は挙げだしたらきりがなく可及的速やかな対策が求められます。インドでは6つの路線を建設する計画があり、そのうち2本が建設中でMumbai-Kolkata間を結ぶインドを横断している全長2000m越えのEast-West線路、インドの南西海岸沿いのEast Coast線路を含む4本はまだ計画段階だそうです。また、JICAの協力により2020年までに6ヶ所で地下鉄設備の確立をめざし、一番早く2017年にはDelhiの地下鉄が完成するそうです。インドの鉄道開発には日本もかかわっておりインド北部のDelhiから北西部のMumbaiまでの貨物列車が今までは時速30～40kmほどしかスピードが出ず移動までに2～3日かかっていたものを最高時速100km、およそ20時間で到着することができるまでに改善することに成功しました。また2023年までに全長505km、最高時速350kmの乗客用新幹線のようなものを作る計画があり、建設費19億円のうち81%をODAとしてJICAが負担するそうです。日本とインドの経済的なつながりが強まり、友好的な関係が続けばいいなと思いました。Jyotiさんは日本在住歴2年ですが、とても濃い日本での生活を送っているようでした。日本にいる間も家族との時間を大切に、同時に日本の鉄道機関に参加し、実際に現場に出るなど、学び続けているそうです。お話を聞いている限りでは日本の生活にとっても満足しているように思えました。専門は違いますが僕もこの大学で自分の専門性を磨き、ゆくゆくは海外での現場も体験しつつ、自国の成長・発展のために尽力できるような人間になりたいと強く感じました。</p> <p>(GY9期生 藤川太一)</p>
2017/11/28	インターンシップ報告会 実施先: JICAインド事務所 JICAタンザニア事務所	坂本 雅咲さん	埼玉大学教養学部3年 (GY7期生)	<p>今回のセミナーはインドとタンザニアにインターンに行かれた坂本さんのお話でした。今回のセミナーは始まる前にタンザニアのお茶を配っていてとてもおいしくセミナーの雰囲気に溶け込むことができました。今回坂本さんは主な目的として、JICAの途上国現地での活動や授業で習ったことや、メディアから得た情報、人から聞いたことを実際に目で見たいというものでした。インドのカーブが低い方々の女性のエンパワメントについて現地インタビューをされる中で、私が気になったのは、養蚕農家で働く女性が成功した養蚕の地に行き自分の村に帰って、刺激を与えたり、より効率よい養蚕を行えるようにするためのフィールドトリップを行う際に、女性はいきたいという意思があったにもかかわらず、夫や男性からの意向によってほとんどのひがいけなくなったという話を聞いたことでした。このことから、まだ女性の地位は低く、自分だけの意思で決定することが難しいということを知りました。また、いまだに女性の教育機会が少ないために社会進出が進んでいないことや、地位が低いことも知りました。タンザニアではJICAの人たちの活動がしっかりと行われているということを知りました。タンザニアでの日本の知名度は高いくらいに、日本人は地域の人と良好なコミュニティーを作り上げ、ほかの国とは違った国民性を生かした丁寧な支援が行われていました。開発を行う上で大切なことの中で、If communication fails, the project fails. ということを知りました。コミュニケーションにおいて言語能力というものはもちろん大切にはなるが、さらに態度であったり、相手に対する尊敬の意を持つことで、相手からの信頼を得なければ自分たちのしたいことは成功しないと知りました。また、今回のインターンを通して困難だったことの中に、専門性の欠如であったり、行動の大胆さに欠けた、アメリカでの留学をしていたにもかかわらずまだ言語の壁があったということを知り、自分もいずれはインターンに行くのでこの先輩のことを糧として自分のこれからは生かしていきたいと考えました。しかし困難の中でも、インターンでは受け身の授業では絶対にわからない事実を発見する楽しさ、学びがあると思うので、しっかりと準備していきたいです。</p> <p>(GY9期生 谷本成星)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2017/11/13	<p>インターンシップ報告会            実施先: ECOSS            (シッキム州環境保全NGO)            インド シッキム州</p>	齋藤 紅葉さん	埼玉大学教養学部3年 (GY7期生)	<p>インドでのインターンシップ            概要的には、インドのNGOでの受け入れによって、インターン活動を行ったという。報告者はアフリカでの観光業について関心があったようだが、アフリカで観光の整備をし、その上でインターンを受け入れている機関はたやすくは見つけられないらしいということも分かった。インドはGDPの合計が世界3位ということもあり、開発途上国とはいええないかもしれない。実際に現地を訪れた感じでは、たくさんの貧しい人々を目の当たりにする、ということはなかったそうであるが、シッキムは観光客が人口よりも多く、またその観光客も大半がインド国内に住む人であると言っていたことから、観光客と現地の人との区別が完全にはできないであろうし、本当に貧しい人は霞んで見えてしまっていた可能性も十分にあるだろう。勤務の内容としては多岐にわたるものであり、シッキムの近辺だけではなく、実際にホームステイ型のツーリズムを行っている地域における調査やプレゼンテーションなども行ったようであった。今回話を聞いて初めて知った言葉があったのでいくつか調べてまとめておこうと思う。私は観光(とりわけ国際的なもの)に関する知識がないので、面白いものばかりであった。</p> <p>エコツーリズム: 国際的には確立された定義はないため、日本エコツーリズム協会による定義を参考にする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること。</li> <li>2.観光によってそれらの資源が損なわれることがないよう、適切な管理に基づく保護・保全をはかること。</li> <li>3.地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護+観光業の成立+地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が持続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする。</li> </ol> <p>ツーリズムという概念の中には、エコツーリズムの他に、アドベンチャーツーリズム、郊外に住まいを構えて落ち着いた時間の提供を主たるものとするリゾートツーリズム、普段の生活とかけ離れた異文化での生活を目的とするホームステイツーリズムがある。</p> <p>ECOSS: インド北部シッキム州にある、NGOであり、地域環境の保全、地域社会の保全に努めている。ECOSSは、政府と協力してエコツーリズムの開発支援を行う機関である。</p> <p>ECOSSと検索して出てきた情報のうち殆どが埼玉大学のGYプログラムに関する情報であったので、国際的に或いは日本国内の人からの認知も低いのではないかと考えた。</p> <p>考えたこと・感想            「カスタマイズできるホームステイ」というのが面白いなと思った。観光客がその土地の文化に触れるなかで、完全に文化に溶け込むことは不可能という前提のもと、どれだけの文化的要素を残した滞在を求めているのかに配慮した取り組みであって、現実の生活を体験するのはまた趣が違う。実際の生活から見て、気づいてまた楽しんでほしい部分もあるかもしれないが、単純に無理なく観光客の数を増やすことはかないそうであると思った。このシッキムの観光業は、国内の人の利用が多いとあったので、感覚的にはわたしが東日本大震災の被災地に復興支援として観光に行くような感覚が近いのではないかと思った。気仙沼などの状況を見ていると、なかなか観光業としての盛り上がり欠け、現地の人々が本当に求めている「この土地のこれがおいしいからぜひ味わってほしい」というような願いが、旅行者には曲がって伝わってしまう部分があるように思っている。インターン報告のなかでも働く人との「文化の違い」からなる苦勞も挙げられた。ゴミを捨てるという感覚がないこと、これは日本人である私にとっては衝撃的であった。日本の企業でインターンを行っても同じかもしれないが、そのコミュニティのなかであたりまえとされているものはなんであるか考え、郷に従って働く必要があるのはインターン生の課題でもあり醍醐味でもあるだろうと感じた。ある程度のその社会のなかのルールに則って、自分の考えを発表したり企画運営に関わったりという経験ができるのは、学生にとって有益なことであろうと感じることができた報告会であった。</p> <p>参考文献            日本エコツーリズム協会HP「エコツーリズムとは」  <a href="http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/what">http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/what</a></p> <p style="text-align: right;">(GY9期生 樋口萌々子)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2017/11/1	<p>インターンシップ報告会            実施先:ICネット株式会社            アジア実践型プログラム            ラオス</p>	立川 友菜さん	埼玉大学教養学部3年 (GY7期生)	<p>今回のBBYセミナーでは、ICネット(アジア実践型プログラム)が行われているラオスでインターンシップを行ってきた立川友菜さんにお話をいただいた。立川さんは一昨年のBBYセミナー報告会で一村一品という地域の活性化を図った運動について知り、それを機に興味を持ち始め、今回のインターンシップを利用して自身でその活動に携わりたいという理由からこのプログラムを選んだという。立川さんが行った主な活動はパタフライピーという東南アジアを原産とする花から作られたティーの商品開発である。具体的には、ティーのフレーバーの決定、その内容物の調達、そしてその詰め作業でこの一連の作業を数週間の短い期間にすべて行ったという。内容物の決定においては、農家だけではなく、現地の市場に実際に赴き情報を得て、需要の生まれるような商品開発をし、商品のパッケージのデザインも自身で行ったという。また、このパタフライピーの栽培したことによる効果として、立川さんが携わった農家の人々は収入が2,3倍になったといい今後も商品開発を期待できる反面、一村一品運動に関わらず、数家族の農家で仕事をしており効率性を考えるとまだ課題が残るのが現状である。インターンシップを終えてきたばかりではあるが、立川さんはインターンシップを通して得た経験を糧に今後インターネットでのパタフライピーティーの販売をクワトロというNGO団体と共同で計画しているという。パタフライピーは疲労回復や頭皮の血行促進、メラニンの沈着抑制などの健康への効果がある他、美容効果もあるということから女性への販売促進を目標としている。現地でも得た経験を実際に具体的な行動目標を掲げて行っているところは今までのインターンシップを終えてきた先輩方とは異なっており、立川さんの熱意を感じた。最後に立川さんはインターンシップを通して感じたことに自主性と積極性の必要性を挙げていた。これはインターンシップだけに限らず、他のことにも言えている。これから留学、インターンシップを控えているが、まだ自主性が足りないと感じるので今後は積極的に行動をしなければならぬと改めて感じる報告会だった。</p> <p>(GY9期生 田盛隆一郎)</p>
2017/10/23	<p>インターンシップ報告会            実施先:JICAキルギス事務所            JICAインターンシッププログラム</p>	大谷 彩瑛さん	埼玉大学教養学部3年 (GY7期生)	<p>今回のBBセミナーでは、JICAのキルギス事務所のプログラムでプログラムでキルギスへのインターンシップを行った大谷彩瑛さんのお話を伺った。キルギスの開発課題としては産業基盤が弱いこと、コミュニティの欠如の二点があり、その課題を改善するための技術協力であるOVOPプロジェクトに参加してきたという。現地では、商品の価格、特徴の比較調査に加え、村の生産者団体の視察やMUJI(無印良品)への商品発送準備などを行なったそうだ。キルギスの会社は日本と違い、とても小規模なため、従業員が8人とごく僅かなところでさえ最大規模であるということがあった。従業員の働き方も個人個人、内職のような形で給与は出来高制で支払われる。このようなキルギスの産業形態は何かをする時には自分で全てやってしまうというキルギスの人々のコミュニティの欠如という開発課題が原因だと思われる。また、大谷さんはインターンシップでの仕事だけでなく、自主的に様々な取り組みを行っていた。本来行われるはずであったSNSでの宣伝はできなくなってしまったが、Twitterを使ったアンケート調査やOVOP商品を活用したカフェの企画書を提出するなど、積極的に活動を行っていた。キルギスでのインターンシップで彼女が得たことの中で私の心に一番残ったことは開発としての働き方だ。JICAの様々な人と交流する中で、現地の人にどれだけさせられるか、という話を聞いたという彼女の話聞き、自分の考えを改めさせられた。私は、途上国であるというアピールも含め様々な手段で、どれだけその国の商品をお金を売ることが大切だと思っていた。だが、それでは現地の人々の自立や成長につながらず、また産業自体も持続性に欠けてしまう。現地の人々の立場になって考えることがやはり大切なのだと思った。大谷さんは今後インターンシップに取り組む我々に、常にアンテナを張る、やりたいことを明確にする、失敗を恐れないなどのアドバイスを下さった。私やほとんどの人々がキルギスを知らなかったように、まだまだ我々は情報収集が出来ていない。情報収集が出来なければ、やりたいことを明確にすることは出来ず、何をするか決めていなければ何かに挑戦することも出来ない。いずれインターンシップに行く身として、大谷さんのアドバイスを活かしていかなければならぬと感じた。</p> <p>(GY9期生 鈴木悠矢)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2017/10/28	インターンシップ報告会 実施先:ノムラ化成(株) 埼玉県海外インターンシップ プログラム	長妻 美智子さん	埼玉大学経済学部4年 (GY6期生)	<p>今回の報告会では、タイの企業でインターンシップを行った長妻さんの話だった。私は、タイは現在発展しつつある国の一つであると学習し、またタイの人々は大変日本人が好きでとても積極的に話しかけてくれるというような特徴も聞いたことがあり、行ってみたい国の一つであるのでとても興味があった。まず、報告を聞いて驚いたのは長妻さんが実際にインターンシップの中で行った仕事だった。私のインターンシップのイメージは、その企業が製造している製造工程の一つを体験させてもらったり、発展のためにどのような援助を行っているのか作業場を訪れたりする、などのものだった。しかし、実際は企業の製造工程を体験する他、商談交渉、プレゼンなどたくさんものことを実践できるものだった。本当に自分がしたいことは何かをこれから見つけて、様々なことのできる限り挑戦してみたいと感じた。次に興味があったのは、現地の人々についての話だった。仕事場での様子についてけじめが足りないのではないかとのお話があった。おしゃべりをして仕事が進まずに残業をしてしまう、というのでは確かによい様子ではない。今すべきことは今、行動しなければならぬ、という意識改革を内側から行わなければならないのではないのではないかと私は考えた。またタイの人々の明るく、積極性がある国民性はとてもいい点だと感じた。その企業で働くタイの人々はタイ語しか話せない人が多かったという話だったが、日本はもちろん、タイの周辺国から仕事をしにくる人もいて、他国の人々ともうまく一緒に働けるのはタイの人々の素晴らしい国民性も関係しているのではないかと感じた。報告会を通して、私は自主性を身につけるべきだと感じた。インターンシップで自分の挑戦したいことを見つけるために、今、自分から何事にも積極的に挑戦していきたい。 (GY9期生 野田頭真永)</p>
2017/10/11	インターンシップ報告会 実施先:JICAベトナム事務所	井出 森洋さん	埼玉大学教養学部3年 (GY7期生)	<p>今回のBBセミナーでは、JICAのベトナム事務所のプログラムでベトナムへのインターンシップを行った井出森洋さんの話を伺った。井出さんは開発経済学の中なかでも主に農業と観光業が開発における重要な点であるとし、ベトナムの農業、観光業の持続可能な開発を目的としたJICAの三つのプロジェクトに参加してきたという。契約農業によって物価の向上や安定を目指したり、現地で取れた作物をブランド化したり、老朽化が進む潮止め用の堰や用水路の門を改修して農地の効率を上げつつそれを町のシンボルとすることで観光客を増やすなど、ベトナムの経済の発展のための開発が行われている。このプロジェクトはまだ始まったばかりであり、今後のベトナムの経済が発展するかは定かではないが、作物の売り上げが上がり、生活の質がよくなったなど、現地の人々は、JICAの活躍に感謝を述べており、プロジェクトの効果は期待できそうである。インターンシップにおいて実際に現地の人とともに働くことは多くの専門的な知識を要し、また二週間という短い期間でのインターンシップであったために、残念ながら井出さんの今回のプロジェクトは見学や話を聞くことで終わってしまったが、彼は自身の新たな課題を見つけることができたためインターンシップに満足していた。私は井出さんの話を聞いて初めてベトナムの現状を知り、またJICAのプロジェクトがベトナムの経済の発展を促進し得ることに気づいた。私もいずれ発展途上国へのインターンシップを行うわけだが、二週間という短い期間の中で自分ができることはなにか、またそのためには何が必要かを事前によく考えておくべきだと感じた。 (GY9期生 高橋阿惟)</p>
2017/7/26	My country Myanmar and my life inJapan	Ms. HSU MON KHIN	埼玉大学理工学研究科 環境社会基盤国際コース	<p>今回のBBセミナーでは、ミャンマーからの留学生として埼玉大学で勉強しているHSUMON KHINさんにお話をいただいた。話のテーマは "My country Myanmar and my life inJapan" というものであった。この題の通り、ミャンマーの文化や、地理、天候、そして歴史的特徴やその魅力、そして彼女の日本での生活について話を聞くことができた。まず簡単にKHINさん自身について述べると、埼玉大学に留学する以前は、彼女はミャンマーで、建設関係の役人の仕事をしていたという。現在は、日本政府が行っている人材育成奨学プログラムという奨学金を受けて、埼玉大学にて、工学部に所属し、特に建築の勉強をしている。KHINさんの話は、かの有名なアウン=サン=スーチーの紹介から始まった。彼女は非暴力民主化運動の指導者で、外相、大統領府相なども兼任して来たミャンマーの政治家である。彼女の人生は、やがて映画 "The Lady" としてまとめられ、世界で放映されている。日本との交流促進の一端には彼女の働きかけもある。続いて、ミャンマーの気候や、伝統的な食べ物、さらには観光地としてよく訪れられる様々な美しい景色を写真で紹介していただいた。食べ物では、日本のものとは少し異なるが、ラーメンがあったり、お茶の文化などがあり、親近感を覚えることができた。また、他にも紹介してくれた中で、私が興味を持ったのが、日本政府が無償資金協力によって計画している、新タケタ橋建設である。すでに着工しており、2018年には完成予定であるという。それまで使われてきたタケタ橋の老朽化に伴って、物流の制限がされてきた。このことによる対策である。KHINさんが建設の勉強をしていることもあり、彼女にとっても非常に関心の中にあると思われる。最後は日本に来てからの、彼女の生活を紹介していただいた。ミャンマーでは役人の仕事をしていたというが、日本に来てからの生活というものはいたって学生らしく、積極的に様々な学びをしているようだった。私が感心したのは、一度社会に出てから、さらに興味のある分野について学びたい、という意欲を持ち、さらに住み慣れない日本での学習・研究の道を選んだことである。上記で述べた新タケタ橋建設のように、ミャンマー発展の面で、日本とミャンマーの繋がりがりがあり、その中で、ミャンマーの学生が日本に学びにやってくるのは非常に有意義なことであると思う。今回のセミナーを通して、時間が限られていたこともあり、KHINさんの話は様々な紹介に留まったが、日本とミャンマーの将来的なつながりを考えていけるような内容であった。かつて日本は第二次世界大戦時に、ミャンマーを占領した過去があったが、KHINさんのような留学生を始めとして、日本とミャンマーとの交流を深め、援助政策も又、その架け橋としていきたい。 (GY8期生 佐藤菜々)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2017/6/19	アフガニスタンより日本へ ～母国アフガニスタンのこと、埼玉 大学での学びを通して感じた事～	Mr. AQEEL ZABIHULLAH	埼玉大学理工学研究科 環境システム工学系専攻	<p>今回の講演では、アフガニスタンから埼玉大学へ留学されているAqeelさんに、アフガニスタンについておもにその歴史と現在、またご自身の経歴と将来についてお話していただきました。国の歴史については、1979年から10年間にわたるソ連の侵攻で大量の難民が隣国へ避難したことや約3万人もの人々が犠牲になったことを知り、焼け野原のような当時の町の写真も見ました。また、この間に進んだ近代化や女性の教育と社会進出もその後のタリバン政権によって厳しく制限されたこと、2001年からのアメリカとの戦争によって再び多くの罪のない民間人が犠牲になったことなどを聞きました。こうした歴史は史実として多少知ってはいたものの、実際にその国の方の口から語られると、文献やニュースで得る知識とは違い非常に現実味を感じるものでした。現在のアフガニスタンの概要のお話では、“Unseen Afghanistan”、つまり私たちがあまり知らないアフガニスタンの一面を紹介していただきました。その中で、自然が豊かで美しい国であること、国民の多くが農業を営んでいること、たくさんの民族と言語が存在していること、日本は世界で2番目に多く支援をしていること、空手が人気であることなどを知りました。私は、アフガニスタンと聞いても思い浮かべるのはアメリカとの戦争とサッカーくらいだったのですが、イメージも大きく変わり、またあまり知られていないだけで意外と日本との関わりもあることが分かり親近感も湧きました。最後に、今回の講演の中で最も印象的だったのは、これまで様々な国に行かれた経験をお持ちのAqeelさんの“Go for study outside country. Love the world and your nation.”というメッセージでした。今もお母国が安全とは言い切れない中、海外に出て学び夢を叶えようとしているAqeelさんのこの言葉は、これから海外に出て行くようしている私たちにとっても響くものであり、海外で学び生活することについて改めて考えを深めることができました。</p> <p>(GY8期生 中居智子)</p>
2017/5/25	シリコンバレーで働く ー夢とパッションー	マーク 加藤	Silicon Valley-Japan Business Consulting 代 表	<p>マーク・加藤氏がシリコンバレーで働くことになったきっかけは非常に意外なものであった。偶然に偶然が重なった結果と言えるだろう。現在では、相当なキャリアを積んだ上で重要な役職に就かれているが、大学までのエピソードを聞いていると、失礼だが、こんな人が社会で自立した大人として生きていけるのだろうかと思ってしまった。しかし、大学を卒業して就職した加藤さんは今までとは大きく異なり、私たちが見習うべき存在となっていた。何となく加藤さんが熱く語ってくださった、「夢を持つ」「目標を持つ」この大切さや「夢の見つけ方」はとても印象的であった。特に、今まで何となくの目標しか持っておらず自分の将来がはっきりしない私には、非常に心動かされるお話だった。加藤さんは、少し遅めの27歳の時に目標としていたhpへの転職が決まったというが、その経験から「目標の設定が早い方が実現の可能性は高い」ということをおっしゃっていた。また、目標を立てる際に重要なのは、具体的な数字と時間を入れることであるということも伝えてくださった。この目標の設定をすることで、嫌いなことも進んで行うようになり、学習が「楽習」となる。しかし、楽習とは言っても人並み以上の努力が必要となる。加藤さんの場合は、大嫌いだっただ英語の勉強を毎日欠かさず行うようになった。ラジオ英会話などいくつかの英語教育のテレビ番組を欠かさず観ただけでなく、ツアーガイドにも挑戦していたことが驚きであった。英語を学習中の者がこのような仕事をするその勇気や行動力はもちろん、同時に、過去に趣味として学んでいたこと(京都などの神社仏閣の情報)を活かしていたことに感心した。さらに、この経験によりhp関係者とのネットワークが作られていたことは、多くの経験をすればするほどチャンスは広がるのだと感じさせてくれた。さらに、目標に向かって努力をされた加藤さんは、転職後も努力を惜しまなかった。英語の話し方を身につけるためにライティングの勉強をしたり、仕事が終わった夜にマーケティングの学習をするために学校に通ったりされており、目標はひとつだが、それを達成するための戦略は複数必要であることを教わった。では、そもそもどのようにして目標(夢)を設定すべきなのか。加藤さんは、「夢の探し方」において必要なことはたくさんものを見る・経験することであるという。多くを見た上で、目標はひとつで良い。そして、それを実現するためには5つのステップが必要である。まずは、好きなこと・得意なことを選ぶ。次に、目標を決める。これは人に話すとも良いという。そして、そのやり方を決め、実行する予定を作る。その上で、それを実現に向けて行動に移していく。この時におっしゃった「『棚からぼたもち』という言葉があるが、ぼたもちはいろんなところから頻りに落ちてくる。でも、棚の下に行かないとぼたもちは取れない。」という言葉は、私の中の格言である。チャンスはそこら中に存在するが、それを自発的に掴みに行かないと何も始まらない。行動力の重要さを改めて感じた。今回、加藤さんは自身の経験から、学生である私たちが今後夢を見つけ、実現していく上で非常にためになることを、学生の視点も交えてわかりやすく教えてくださった。そのため、今までは何となくの目標しか立ててこなかったが、今後は具体的な夢や目標を設定し、自発的に多くの経験をすることで降り注ぐチャンスを無駄にすることなく、その実現のために努力をしていきたいと強く思えた。</p> <p>(GY8 渡辺 夏菜子)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2017/5/12	インターンシップ報告会 実施先:カネパッケージ(株) フィリピン	田中 雅美さん	埼玉大学 工学部 3年 (GY7期生)	<p>今回のBBセミナーでは、カネパッケージ株式会社でインターンシップを行った田中雅美さんのお話を伺いました。カネパッケージ株式会社とは、埼玉県に本社をもつ主に梱包事業を行う会社です。日本以外にもフィリピン、インドネシア、タイなど東南アジアを中心に支社を展開しており、2009年からは地球環境改善活動の一環として、フィリピンにてマングローブ植林活動を実施しています。田中さんのインターンシップはフィリピンにて行われましたが、その内容はマングローブの植林・調査をはじめ、政府とカネパッケージ株式会社とのミーティング視聴やデイケアセンター(幼稚園)・小学校の訪問、アジア開発銀行でのインタビューなど非常に濃いものでした。私が田中さんの発表をお聴きして特に感銘を受けた点は、行く先々で何が問題となっているか、その原因は何かを常に分析し、わからない点は質問するという田中さんのインターンシップに対する積極的な姿勢です。田中さんが訪問された離島の小学校では、教師が不足していたそうです。その原因は、教師の給料が安く、都市に出稼ぎに行く方がより多くの収入を得ることが出来るため、なかなか離島の教師になりたがる人がいないからだ、と田中さんはおっしゃっていました。また、植林活動における“People's Organization”に関する問題も、強く印象に残りました。“People's Organization”とはマングローブを管理する地域組織です。普段漁で生計を立てている地元民から構成されているのですが、その忙しさのあまりマングローブの管理をおろそかにしがちで、お金を払わなければなかなか活動をしてくれないという現状があるそうです。田中さんは、彼らはマングローブの利点が防波堤としての役割を果たすことだけだと考えているが、彼らの生計を立てる手段である漁の漁獲量の増加にもつながることを認識してもらえば、現状が変わるのではないかとおっしゃっていました。私もインターンシップを行う際には、田中さんの積極的な姿勢を見習い充実したものになりたいと思います。</p> <p style="text-align: right;">(GY8期生 江連佑華)</p>
2017/4/24	インターンシップ報告会 実施先:ボランティアプラットフォーム カンボジア	大谷 琴恵さん	埼玉大学 教養学部 3年 (GY7期生)	<p>大谷さんはカンボジアの学校へボランティアに行っていた。授業に日本語の科目があり、その丸付けなどをしていただいていた。休み時間になると、子供達と遊ぶ機会もあったという。また、今回多くの写真も一緒に見せてくれた。そのため、現地の様子をより詳しく知ることができた。大谷さんがカンボジアに行っていた時期よりも前だが、私もカンボジアに学校建設のボランティアをしに行っていた。なので現地の写真はとても懐かしく思った。また、彼女は現地でホームステイをしていた。日本語も英語もちゃんと伝わらない場所で2週間も過ごすなんて、大変勇気のいることだと思う。プレゼンの最後に大谷さんは、このボランティアは長期休みの時期になるとボランティア生でいっぱいになるから人数コントロールをした方がいいのでは、とおっしゃっていた。しかし私はする必要はないと考える。理由は、カンボジアの子供たちは私たちと遊ぶことをとても楽しみにしているからだ。私もカンボジアにボランティアしにいったが、学校に着くとすぐ子供たちがみんな近寄ってくる。言葉は全く通じなくても、ゴシヨゴシヨしあったり、鬼ごっこしたり、よくわからない遊びに巻き込まれたり、、私たちが小さい頃に大きなお姉さんお兄さんがいると楽しかったのと同じだろう。また遊び道具が少ないカンボジアでは、ボランティア生と遊ぶことが究極の楽しみと言っても過言ではないのだろうか。あとは、大谷さんが行っていた学校は、そこのボランティア団体がお金を出しているから無償で学校に行けるとおっしゃっていた。だからもし人数制限をしてしまうと、学校運営するためのお金が足りなくなってしまうのではないかと考える。</p> <p>私もこれからインターンシップで海外へ行くわけだが、今回の発表を聞いて子供達と触れ合う機会が多いものを探していきたい。</p> <p style="text-align: right;">(GY8期生 鍋木瑞月)</p>
2016/12/8	「変貌するアジアの開発課題」	玉置 知己氏	現法政大学大学院兼任講師 元アジア開発銀行 (ADB)駐日代表	<p>今回のセミナーでは、アジア開発銀行(ADB)で駐日代表を務めておられた玉置知己さんのお話を伺った。ADBは、アジアの世界におけるGDP比率が最も低かった1960年代にアジアや太平洋地域における経済開発を支援することを目的として設立された国際開発金融機関であり、最も出資金を多くだしている日本が、活躍している国際的に重要な場である、と仰っていた。これまで貧困の削減と脱出を目的としていたADBの主要支援国の多くは中所得国となっており、その中所得国を高所得国に押し上げることも目標としているが、それを達成するには様々な課題を乗り越える必要がある。中所得国まで成長した国が人件費の高騰や高所得国、先進国との技術格差によってなかなかそれ以上成長することができないといった「中進国の罠」が問題となっており、これを抜け出すためにどうすればよいかを考える必要がある。また、中国を主導して発足されたアジアインフラ投資銀行(AIIB)と支援対象国、エリアがオーバーラップしてしまうが、アジアの莫大なインフラニーズに応える機関として、協力し合うことが大切である。また、玉置さんによればアジアでのインフラ開発を進めていくにあたって重要なことは、既に多様な資金ソースを持つまでにはいたったアジアの国々においては、政府開発援助(ODA)よりも、民間企業による協力が一層重要となってくるそうだ。日本でも例としてインドネシアの地熱発電に九州電工や伊藤忠、東芝等や日本の主要銀行が国際協力銀行の支援のもと関わっている。ADBでは官民パートナーシップ(PPP)促進のため、啓発・能力育成、環境準備、ファイナンス、能力の欠如に対応した案件作成の4本の柱を軸としたアプローチを行っているそうだ。アジア経済発展のため、経済支援や他の機関・企業、先進国との意思疎通など、ADBの必要性はこれからも今まで以上に重要なものとなってくるだろう。今回のセミナーで話を聞くまで恥ずかしながら私はアジア開発銀行という名前を聞いたことがある程度でその実態まではあまり良く知らなかったが、どのような活動をしているか、や多くの日本人が働いている、ということを知って経済開発の重要性や工学部である自分がインフラ開発等で何か活躍できないか、などと考えることができるいい機会を持つことができたと感じた。</p> <p style="text-align: right;">(GY8期生 許田翔一)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2016/12/2	留学報告会 留学先:アーカンソー州立大学(米国)	野本 香織さん	埼玉大学 教育学部 3年 (GY6期生)	<p>今回のBBセミナーでは自然が豊かで「自然の州」ともいわれるアーカンソー州にあるアーカンソー州立大学に2セメスター行かれた野本さんにお話を伺いました。まず留学前にしておくべきこととして、ERCやSITCなどを通して積極的に英語を話す機会を増やしておくこと、新聞や本などを通して海外の文化は言うまでもなく日本の文化についても知っておくこと、奨学金の情報には目を光らせチャレンジすることなど、留学を目前にした私たちにとってためになるお話をたくさんしてくださりました。また、留学中の生活や授業、課題についての細かい部分まで話され、留学の楽しいところはもちろん苦労や努力もひしひしと伝わってきました。カフェテリアで友達作りに励んだという話を聞いて待っていても何も始まらない、自分から行動し未来を切り開いていくことの重要性を痛感し、私自身がこの環境に甘え、受け身がちであるということに改めて気づかされました。おおらかな野本さんの性格とユーモアあふれる話し方に惹きつけられ、また、この留学経験を生かしたインターンシップを行ったとおっしゃっていたので機会があればまたお話を伺いたいと思いました。</p> <p>(GY8期生 高木望愛)</p>
2016/11/16	「私の人生、私の国タンザニア、私のプライド」 ~ABEイニシアティブ留学生として 埼玉大学に留学して~	Ms. Aisha Ulenge Sabry アイシャさん	ABEイニシアティブ 留学生	<p>今回BBセミナーで話を聞き、タンザニアについて今まで知らなかったことを多く知ることができた。TanganikaとZanzibarから成り立つタンザニア共和国の中に、民族集団が多く存在しているにも関わらず、共存できているのは素晴らしいことだと思う。マサイ人などいくつかの民族がスライドショーの中で紹介されたが、それ以外の民族の生活様式や考え方も知りたいと思い、調べてみようと思った。また、国旗の緑が森林などの国土と農業、黒は国民、青は海、黄色の線は豊かにある鉱物資源のことを表現されていることを知った。また食べ物に関しては、Ugali(ウガリ)というとうもろこしや雑穀を使って作られる主食、海産物、豊富な果物があることを知った。特に果物は、写真で見ると本当に色合いが鮮やかで綺麗なものが多く、食べてみたいと思った。次に経済面についてだが、タンザニアの経済成長率は圧倒的に高いことがわかった。コーヒー、砂糖、綿、ダイヤモンドなどの鉱山物、観光が主な産業になっているようで、きっと今後も経済的に成長していくことだろう。だが、鉱山物については限りある資源であると思うので、ここに関しては代替品を見つけることも重要な課題ではないかと思った。観光産業については、スライドショーの中にもあった通り、キリマンジャロ山やヴィクトリア湖などの絶景があるようである。私は、観光産業は、グローバル化が進み、人の行き来が盛んになりつつある今、この伸びしろは期待できるものと考えます。また、ンゴロンゴロ保全地域などの国立公園など、貴重な動物が多く生息していることも観光産業の盛んさに大きく貢献しているだろう。この多様な動物たちを保護することは、国家の経済面においても地球の環境面においても重要なことであろう。また、インフラについての話がもあったが、舗装されていない道や、電車がいないことなど、ここに関しては多く改善することがあることを実感した。バスや車が多く使われているようだが、このことは環境破壊につながるであろうことなので、早く改善すべきだと考える。最後に、タンザニアでは知らない人と会ったときに挨拶したり、話したりすることが一般的であると聞き、素敵な国民性だと思った。そのような国民性だから、多くの違った民族が存在する中で共存できるのだと思う。いろいろと話も聞けて、タンザニアに魅力を感じたし、是非私もタンザニアに行ってみたいと思った。</p> <p>(GY8期生 堀口友里)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2016/11/11	インターンシップ報告会 実施先:V-shesh(社会企業) インド	笹生 彩さん	埼玉大学 教養学部 4年 (GY5期生)	<p>インドのチェンナイへV-sheshのインターンシップに行かれた笹生彩さんのお話を伺いました。2009年に設立されたV-sheshは、障がいを持つ方々の就職などをサポートする社会企業です。V-sheshの活動には、主に三つの特徴がありました。一つ目はEmploymentです。V-sheshには、就職活動の支援として、約三週間のトレーニングプログラムが用意されています。プログラミングなど就職に必要な技術を身に付けてもらう取り組みです。コース費用は高めですが、活動が自分に合わずに止めるなど最後まで続けられなかった場合は、費用を払う必要がないという配慮の下で行われているようです。二つ目はInclusionです。多様性のある状態に焦点を当てたDiversityに変わって、人々が対等に関わって、組織に参加している状態を作ることには焦点を当てた考え方です。これを企業に広めていくことで、障がいの方々の仕事の幅が増え、障がいの方が自分らしく存分に力を発揮したり貢献していると感じたりできる可能性が広がります。V-sheshはInclusionの普及を目指し、ビジネスとして企業評価レポートの作成を行っています。会社がいかにバリアフリーであるかを、物の位置から、幅、長さ、高さ、角度に至るまで綿密に評価をしたレポートだそうです。3つ目は、Educationです。インドの高等教育は全て英語で行われているため、英語を克服しないことには、大学進学は難しいそうです。選択の幅を広げるために英語教育にも力を入れ始めたそうです。笹生彩さんはインドでのインターンシップ・ホームステイを通して、特に、地元の方の物事への向き合い方に学ぶことが多かったそうです。日本人は、100%の正解を求め、その通りに出来なかった場合は「不可能」「失敗」と捉える風潮があります。しかし、インドでは、一つの正解にこだわらずフレキシブルに転換していく姿勢、人それぞれ出来ることを全うする姿勢が印象的だったそうです。「初めての途上国で目の前で受けた衝撃は大きかった。」と振り返る笹生彩さんの姿にもインドの方のような強さを感じました。私は、前向きで臨機応変な姿勢が、不都合の多い途上国で障がい者支援を行うという先駆的な会社、V-sheshの活動の原動力になっていると感じました。これから留学やインターンシップなど初めての地で新たな挑戦をしていく機会が多々あります。想定外の出来事に直面してもインドの方々のように生き抜く力を身に付け、恐れず立ち向かっていきたいと思いました。</p> <p>(GY8期生 前島玲美)</p>
2016/11/4	インターンシップ報告会 実施先:NICE(国際ボランティア) カンボジア	杉原 睦子さん	埼玉大学 教育学部 3年 (GY6期生)	<p>杉原さんはカンボジアで2週間現地での英語教育に携わるボランティア活動に参加されました。教師になりたいという夢と留学で培った英語力を生かしたいという理由からインターンシップよりかはボランティアの方が適していると考えボランティアを選んだそうです。CYA learning centerという夏休み期間に開かれるフリースクールで、ほかの日本人ボランティアスタッフと共に英語の授業を担当しました。CYA learning centerはCambodian Youth Actionという団体の運営する施設で、地域住民が英語を自由に学べる場、また文化やバックグラウンドの異なる人との交流の場として設立されました。現地の子どものレベルについて情報共有がうまくなされていなかったこともあり、最初の数日はうまく授業ができなかったそうです。しかし、子どもたちを飽きさせないような授業を意識し、福笑いや折り紙、カルタなどを英語で行ったところ楽しい授業を展開できました。実際に授業をしてみて子どもたちの学ぶ意欲に圧倒された一方で、本当に英語教育はカンボジアに必要とされているのか疑問に感じたそうです。ボランティア活動の内容として子どもたちへの授業の他に、地域散策、地域住民へのインタビュー、教室の修復作業、スポーツ大会などがあります。地域散策では水不足やごみの放棄などの問題を目の当たりにしました。地域住民へのインタビューでは、教育意識は低いものの親たちは子どもにはいい教育を受けさせたいと考えている、と言うことがわかりました。また、教室の復旧作業ではドライバーなどの道具不足やボランティア側の技術力不足などの問題点が見えてきました。全体の感想として、他のボランティアスタッフとの協調性が求められる点、ボランティアとしてできることに限界がある点に困難さを感じたそうです。また、ボランティア中に思った「英語教育はカンボジアに必要な教育であるか。」という疑問に対して、必要か否かは別として英語教育を受けるといったような選択肢を広げることが大切でありボランティアにできることである、という考えに至ったとのこと。報告を聞いて、海外ボランティアに興味がある私にとって杉原さんの報告は、ボランティアのプラス面とマイナス面がわかる、大変になるお話でした。現地で直接人々と関わるといふ長所があるボランティアですが、インターンシップとは違い自分主導での活動がしにくいという短所があります。自分は何に興味があってどんなことを実際に行いたいのかを熟考し、インターンシップとボランティアのどちらが自分に適しているのか決めていきたいと思っています。また、ボランティアができることには限界があるというお話から、自分はボランティア先にどんな良い影響を与えることができるのかも考えていきたいです。</p> <p>(GY8期生 内田 涼子)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2016/10/28	インターンシップ報告会 実施先: JICAインド事務所	塚田 咲子さん	埼玉大学 教育学部 3年 (GY6期生)	<p>今回のセミナーでは、3週間のインターンシップとして、JICAインド事務所へ行かれた、教育学部の塚田咲子さんのお話を伺いました。インターンシップと聞くと、現地の職員の方のお手伝いをするというイメージでしたが、そうではなく、お手伝いもさることながら、自分で決めて行動するという場面が多岐にわたりあったそうです。また、私はインドが、インフラ整備や公共設備が整っていないイメージがありましたが、実際にはデリーメトロやDTCといったものが充実していました。そこでは、インドの近年のジェンダー問題に対応して、女性専用車両、監視カメラ(OCTV)など、安全に気を配った対策がとられていたそうですが、まだまだ女性が十分満足してそれを利用できない問題があるそうです。次に、インドでは貧富の差があることで有名ですが、塚田さんは、ハイクラスの子供が通う学校と、そうではない子供が通う学校の両方へ行き、実際に授業を行ったそうです。そこでは子供たちの貧富の差に関係ない学習意欲、先生方のイレギュラーなことに対応できる指導力が目覚ましかったようです。しかし、公立学校の人数の関係で私立学校へ通わなければいけない子供もたくさんいるようで、そのことから、世界の“安くて質の良い学校を”という声ますます高ぶっていくのではないかと感じました。他にも塚田さんは公衆トイレなどにウェイトを置いた調査をなさっていて、その発展の過程を知るのも興味深かったですし、衛生教育などをして、個々人の意識改革を図る必要があるなど、まだまだ課題はありそうでした。最後に、塚田さんは文化に触れる、異なる人々とのふれあいが大切であるとおっしゃっていましたが、確かに、そうすることで自身の知見を広められますし、文化に対する相互理解が生まれ、ちょっとした争いごともなくならないかと思えます。今回のセミナーでは、現在のリアルなインドの状況、ひいては今後の参考となるような、インターンシップの醍醐味も知ることができました。 (GY8期生 末廣 珠季)</p>
2016/7/15	「国際エネルギー期間(IEA)における 国際協力と危機管理 ～インターン シップ報告	川嶋 久美子さん	埼玉大学 教養学部 4年 (GY4期生)	<p>今回のBBセミナーでは、昨年9月から今年の2月まで国際エネルギー機関(IEA)でインターンシップを経験しパリで生活をなさった川嶋さんにお話を伺いました。まずは、IEAがどのような組織でどのような役割を果たしているのかについて聞きました。インターンシップの内容として、COP21のIEAブースでの訪問者への質疑応答や情報提供、中国デスクでのアシスタントなどが挙げられます。川嶋さんはインターンシップを通して、言語はコミュニケーション手段に過ぎず、何を相手に伝えるか中身が重要だということ、組織と同じベクトルを向いて行動することを学んだそうです。また、昨年11月に起きたパリ同時多発テロ事件を通して社会や一般の人々の様子として、テロに屈しない姿勢を感じたそうです。テロに効果があるとテロリストに思わせない、通常通りの生活を送るといった事に現地の人々は努めています。川嶋さんはテロに対して、たとえテロで命を落としてもそれが敗北を意味するわけではなく、テロリストの敗北を示すという考えに至ったそうです。この危険は、私たちが日本でも起こりうることであるので、世界どこにいても冷静に対応することが必要だと思いました。その他にも、ヨーロッパ旅行を通じて、市民の犯罪に対する危機感や日本は世界からの強い信頼があることを感じ取ったそうだ。最後に、留学やインターンシップをすることで、この先になりたい社会人像を具体的に想像することが可能になります。進路を決める際は、自分の軸は何かをしっかりと見つめることが重要であると教えていただきました。この先、社会に出ていくためには、他社との差別化を図り、能動的に行動していきたいと思いました。 (GY7期生 立川友菜)</p>
2016/4/15	「青年海外協力隊が見た中東、イス ラムの今」	廣瀬 勝弘氏	JICA埼玉デスク 国際協力推進員	<p>青年海外協力隊として二年間ヨルダンでご活躍された廣瀬さんのお話を伺いました。ヨルダンは、場所も分からないほど自分にとってはあまり馴染みのない国であったのですが、ヨルダンの文化や暮らしのお話を伺って、予想に反して就学率の高いことや、観光業が盛んであるということに気がつきました。また、中東をとりまく問題についてもお話していただき、難民や紛争被害、高い失業率といった日本とは異なる問題を抱えているということを知りました。難民に関しては、ヨルダンに住む6割近くは避難民であり、難民キャンプは街として成立していて、経済がまわらせるほどの状態であるそうです。また、パレスチナの難民キャンプには、文房具は一人一人にいきわたってはいないものの、立派な学校があるなど、設備も整っているとのことでした。私は、難民の数が増加しているために、受け入れが困難になり、彼らは肩身の狭い暮らしをしているのではないかと勝手なイメージを抱いていたため、そのような現状にとっても驚いたとともに経済を圧迫する難民問題をどう解決していくかが今後の課題であると感じました。さらに、廣瀬さんの環境教育に関わる活動内容とヨルダンの教育の現状についても聞かせていただきました。廣瀬さんは協力隊として現地の学校に赴き、子どもたちの自然への関心を引き出して、リサイクルの促進やコンポストの提案などの環境教育を行われたそうです。道端にパンを山積みにしておいている子どもは、宗教の考えに基づく行動であったという体験談を聞き、環境を保護するためにごみを道に捨ててはいけないという考えとどう折り合いをつけるかが非常に難しかったのではないかと思います。学校教育の内容に関しては、算数などの主要な科目から掃除の仕方といった実務的なものまでであったようです。教員を目指す者として、改めて世界の教育の現状を知りたいと感じました。 (GY7期生 若山真子)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2015/12/2	インターンシップ報告会 実施先: JICAワシントン事務所、 v-shesh(社会企業)インド	加藤 みつきさん	埼玉大学 経済学部 3年 (GY5期生)	<p>今回のセミナーではJICAアメリカ事務所と、インドのV-sheshに行かれた加藤みつきさんのお話を伺いました。</p> <p>まず、JICAアメリカ事務所は途上国のJICA事務所とは異なり現場での活動はなく、最新の支援についての議論や情報収集を行うことで各事務所との連携をスムーズに行うための役割を果たしています。加藤さんはこの期間にLet Girls Learnというミシェル夫人が主催している活動の調査まとめや、新聞から援助関係のニュースをまとめて記事作成、世界銀行に勤めている方へのインタビューを行ったそうです。これらの活動を通して、何か情報を伝達する際に受け手にわかりやすくすることの重要性を学ぶと同時に自身の英語力と作業効率を測ることができ、今後の進路にむけて課題を明らかにすることができたそうです。次にインドのV-sheshでは、身体障害者の雇用を改善し彼らが自分たちで収入を得られるような機会を支援する活動を行いました。V-sheshの活動はインドの貧困問題の一端を解決することにもつながります。活動内容は、日本語能力試験のトレーニングのレポート作成や、日本語の歌の指導、学習障害を持つ人への指導補助などでした。特に、就労支援の活動では雇用する会社にも有益になるように、英語や事務業の指導を行っていました。これらの経験を通して、相手を理解する姿勢や、協力者を見つけることの大切さを学んだそうです。これらのインターンシップを通して、特にインドでは現地語に親しみを持とうとすることの大切さを実感し、また実態を把握し物事を難しくしている原因を考えることの大切さも学んだそうです。加藤さんは、事務的な作業をするインターンシップと現場での活動をするインターンシップとの2つの経験を通して、人と関わる活動が好きだということを実感したそうです。</p> <p>(GY7期生 斉藤紅葉)</p>
2015/11/20	インターンシップ報告会 実施先: ICネット(ラオス)	白澤 佑起さん	埼玉大学 経済学部 3年 (GY5期生)	<p>白澤さんの発表は、ラオスでのインターンシップの話と、ラオスの情報の二つに分かれていました。まず前半のインターンシップの内容は、一村一品プロジェクトについてでした。ラオスの村々には、豊かな自然があり、伝統的手法を用いた工芸品が存在するにもかかわらず、市場へのアクセスの悪さであったり、消費者のニーズに合っていないデザインであったりいくつかの理由から、商品が売れない状態が続いていました。その改善のために、ラオス南部5県にある村々へ、タイや日本から専門家を呼び、商品開発、技術支援やマーケティングデザイン支援といった活動を行ったのが一村一品プロジェクトでした。このとき、商品は現地の文化を尊重し、かつ村人の生活水準を向上することを目標としていました。そして実際に白澤さんが行った業務は、各村のプロフィールや商品の説明や写真などのカタログ作り、商品の情報などの掲示物作り、商品を製造した村が載っている南部の地図製作、ブランドのロゴのデザインと作成などの商品タグ製作でした。また、白澤さんはラオスの現状の問題もいくつか挙げていました。例えば、ラオスの特産品として販売しているラタンなどの市場に出回るためには外国の企業と提携を結ぶことが必要である一方、そのような企業がラオスの製品を知る機会が少なく、この一村一品プロジェクトも今回が最後だったとも言っていました。後半は人口、宗教、人々の生活などラオスについての話でした。いくつか問題を挙げていたのですが、その一つにタイへの出稼ぎ、不法労働など隣国タイとのつながりをとりあげていました。タイとラオスは言語がほぼ一緒ということもあり、タイプラスワンといった産業的な動きもあるそうです。</p> <p>(GY7期生 加藤功大)</p>
2015/11/16	インターンシップ報告会 実施先: Cuddles Foundation 子供支援NGO(インド)	岡部 優さん	埼玉大学 経済学部 3年 (GY5期生)	<p>今回のセミナーでは、インドのCuddles FoundationというNGO団体でインターンシップを行った岡部優さんのお話を伺いました。Cuddles Foundationは、がんの子どもたちに対して栄養剤・サプリメント・教育を提供する団体だそうです。この活動の社会背景には深刻な問題があり、小児がんにおかされたインドの子どもの生存率は10人に2人という世界平均と比べると非常に低い数字だそうです。私にとってこの半数にも満たない数字はとても衝撃的で、治療や栄養が行き届いていないという世界の現状を実感しました。がんにおかされた子どもの中にはお金がかかるために治療を放棄してしまう人が多いそうですが、栄養を取ることの重要性を伝えるCuddlesの活動により、治療放棄率は大きく減っているようです。そんなCuddlesで岡部さんが行った主な仕事は、チャリティーイベントの企画運営、寄付活動のお手伝いだそうです。イベントでは、この団体の活動内容と小児がんの現状を知ってもらうのが目的でしたが、残念ながら人が十分に集まらず、満足のいく結果で終わることができなかったようです。しかし、イベントをメンバーの一員として一から企画することで、社会人としての責任を感じることができたそうです。このことを聞いて、働く国や内容は違っても、働く姿勢や責任感は世界共通なのだと思います。また、インターンシップは、異文化理解・国際問題といった大きなものを学ぶだけでなく、自分にとって身近なものを改めて問い直す機会なのだと感じました。Cuddles Foundationはインターン生の受け入れが初めてだったそうですが、フレッシュなアイデアをプロジェクトに合わせることができ、インターン生を受け入れてよかったという意見をもらえたそうです。というのも、Cuddles Foundationは一人一人のスキルを生かした活動を行っているので、外国人としての意見は貴重であるみたいです。私もインターン先では、受け身の姿勢でのではなく、メンバーの一員として自分の考えを共有し、インターン生だからこそできる行動で充実した活動にしたいと思います。</p> <p>(GY7期生 若山 真子)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2015/11/11	インターンシップ報告会 実施先: JICAタンザニア事務所	金城 花蓮さん 奥野 優人さん	埼玉大学 経済学部 3年 埼玉大学 理学部 3年 (GY5期生)	<p>今回2人が選んだインターンシップの受け入れ先は、タンザニアで最も発展した町ダル・エス・サラームにあるJICAタンザニア事務所である。東アフリカに位置するタンザニアをインターンシップ先にした動機は ・発展途上国で働くとはどういうことか ・アフリカの環境や生態系 ・中国の進出の現状 の3点について理解を深めたい、ということが挙げられた。2人が参加した地方道路開発技術プロジェクトとO&amp;ODについて、以下で詳しく紹介する。</p> <p>タンザニアにある比較的人口の多いイリンガという県では国内のモデル県として、道路整備に関わる技術支援を受けている。このプロジェクトで特徴的なのはLabor Based Technologyに基づいて全て人力で作業を行っている点である。具体的には、コンクリート等を一切使わずに更地の土をならし、盛り上げることで道路を造っている。これによって現地の人々の雇用を生み、彼らと専門家との繋がりを強くすることができる、といったようなメリットがある。また習得した技術を自分たちで他県に広げていくので自助的な開発が可能である。一方で、モニタリング・プロセスの会議が約3ヶ月に1回程度しか行われていないこと、雨季になるとせっかく整備した道路が必ず壊れてしまうことなどから、このプログラムに対する疑問もある。</p> <p>もう一つのプログラムO&amp;OD(Opportunities and Obstacles to Development)は、地方分権を推進するためにUNICEFが前身となって戦後日本のスタイルを導入したものである。各群に置かれた公務員のワードファシリテーターを県や村との仲介役とし、彼らをトレーニングすることで地方の声が上部組織の決定に反映するようにしよう、というものである。実際の会議では、訓練を受けたワードファシリテーターが決まった方法で要望を整理しており、その水準は極めて高い。この制度によって地域に新しいテナント・橋を造るに至った事例もある。その村ではテナントの屋根までは金銭的な問題で完成させられない見込みであったのだが、上に支援を要望したことで交付金を受けることができたのである。完成したテナントでの売り上げの半分は村の資金となり、村にとって不可欠となっている。一方で橋の建設では、暴走車も通るようになり砂煙が巻き上がってしまう、というような問題や、それを取り締まる制度の緩さといった課題も新たに見つかった。</p> <p>まとめとして途上国で働くとはどういうことかについて、現地職員の方の話が紹介された。曰く、苦労に見合った成果が出ないこともあれば情報と現実の間の大きなギャップから葛藤することもある、という。しかしその中で努力する楽しさや、流れる時間のゆったりしていることも魅力であるようだ。</p> <p>(GY7期生 井出森洋)</p>
2015/11/4	インターンシップ報告会 実施先: ECOSS:シッキム州 環境保全NGO(インド)	小嶋 早智さん 金子 万次郎さん	埼玉大学 教養学部3年 (GY5期生)	<p>今回のインターンシップ報告会ではインドのシッキム州でインターンシップを行った小嶋早智さんと金子万次郎さんのお話を伺うことができました。お二人はEco-Tourism &amp; Conservation Society of Sikkim(ECOSS)という、インドの環境・文化保全やエコツーリズムを推進するNGOで、4週間インターンシップを行ったそうです。お二人が活動の1つとして行った公立学校訪問では授業として観光という科目があり他の授業と同じように中間テストや期末テストもあることに驚きました。子どもに観光について知ってもらうことでその親やさまざまな人たちに広めていくことができるのでとても大事なことだと思いました。またこの報告会で私はゼロウェイストプロジェクトについて初めて知りました。ゼロウェイストプロジェクトとはある観光地の入り口にチェックポストを設け観光客の所持品を確認して(例えばペットボトル何本など)、出口のチェックポストでその数が入ったときと同じかどうかを確認し一致していなかったら罰金を科し環境への負荷を軽減しようというものだそうです。また出口でゴミを回収しそのゴミを利用して新しい商品を作るといふことも行われているそうです。マストツーリズムの問題の1つとして環境への負荷があげられる中で、このプロジェクトにより観光による環境への負荷が減るのではないかと思います。しかし、プライバシーの考え方の違い、道路未整備、バスルームの清潔さや観光用のパンフレットや地図がないことなど改善すべき課題は少なくないということでした。お二人のお話を聞いて一番難しいと思ったことは観光によりすべての人が利益を得ることができるわけではないということです。特に貧困層の方たちは利益を受けにくいとのことでした。観光業を促進していく中で貧困層の人たちに雇用の機会を与えることのできる政策が必要になるのではないかと感じました。小嶋さんと金子さんは4週間という短い期間で多くの経験をしてすごいいいと思いました。自分もインターンシップの際には多くを学べるように自ら行動をしていきたいと思います。</p> <p>(GY7期生 田中 雅美)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2015/10/30	インターンシップ報告会 実施先:ICネット	遠藤 紗織さん	埼玉大学 経済学部 (GY5期生)	<p>今回のセミナーではラオスの首都ビエンチャンにあるJ-MARTにインターンシップを行った遠藤紗織さんの体験を伺いました。今期3人の先輩からインターンシップでの体験を伺いましたが紗織さんは今までの先輩方とは違って、自らJ-MARTのプログラムを見つけ参加されました。J-MARTとは日系企業で主に南ラオスに展開している、いわばスーパーマーケットで他にもコンサルタント・ホテルなど幅広く活動をしているそうです。紗織さんは実際に広告のチラシ作り(本物を拝見しました)・ポップ作りそしてお店の改善点をインターンシップ生が提案するという事です。具体的には段ボールに入った商品の中身が分かるように段ボール箱に中身の写真をはって賞味期限を書くことで、今までの無駄を省くことができたそうです。そこで紗織さんたちインターンシップ生が帰国してからそれら改善点が伝承されるのかという問題が上がり、4か国語話すことができるタイ人の社員がいるとのことでした。これは他の国・地域でも同じですが改善点を考案しても伝承していくことの難しさを感じました。またラオスにおいて物乞いが比較的少なかったというお話がありましたが、バンビエンに行かれた際に販売されていた川魚が計画経済の名残でどの店も同価格、同じディスプレイで差別化がされていないとおっしゃっているのを聞いてラオスという国は発展してきているが田舎部などまだまだ課題はたくさんあることを痛感しました。最後に、明確な目的を持つべきだったという紗織さんの言葉がとても胸に響きました。理想や目標はいくらでも語ることができますが大切なのは自分の目的、中身の詰まった思いなのだと感じました。密度の濃いインターンシップにするために、中身を詰めるための知識を身に着けること、そして明確な目的をみつけていきたいです。</p> <p>(GY7期生 内田 綾香)</p>
2015/10/21	インターンシップ報告会 実施先:JICAインド事務所	斉藤 綾のさん	埼玉大学 経済学部3年 (GY5期生)	<p>今回は、インドのデリーにあるJICA事務所でインターンシップを行った齋藤綾のさんのお話を伺いました。齋藤さんは主に、女性をとりまく現状、公共交通機関の実態、インドの貧困の3つについてお話をしてくださいました。女性をとりまく現状として問題となっているのは、主に男の子を好む風習による子どもの産み分け、ダウリー、卑劣な強姦事件です。中には女性に硫酸をかけて失明させるといった残虐なものもあります。このように未だ男女の格差が残るデリーで、女性が最も危険を感じる場所は公共交通機関だそうです。そのため、近年公共交通機関では、女性の保護に関する対策が進んでいます。メトロやバスでは女性専用車両、カメラや緊急ボタンなどが導入されています。齋藤さんが現地で行ったインタビューによると、メトロは本数も多く、女性が安心して乗れる環境が整備されてきていますが、一方バスは運賃が安いために教育水準の低い乗客も多く、まだ課題は多く残っているとのことでした。さらに、デリーには物乞いをする子どもが多く、トイレも未整備などがあり、貧困の根深さも痛感したそうです。現在、これらの問題を改善するためにNGOやUN WOMENが協力して取り組んでいますが、このような活動が行われていることを多くの国民は知りません。また、メトロやバスで女性が痴漢の被害にあっても通報しないケースが多いそうです。そのため、学生団体との連携強化や、企業からだけでなく、市民の中から変わる必要があると齋藤さんはおっしゃっていました。人の意識を変えるのは難しいことですが、女性がより住みやすい環境を作るためには勇気を出して声を上げることが大切だと実感しました。私がインターンシップに参加した際は、自らインタビューを行った齋藤さんの積極性を見習い、あらゆる視点から現地の実態を学んでより多くのことを得られるようにしたいと思います。</p> <p>(GY7期生 大谷 琴恵)</p>
2015/10/16	インターンシップ報告会 実施先:JICAベトナム事務所	片島 なつみさん	埼玉大学 教養学部3年 (GY5期生)	<p>JICAのベトナム事務所でインターンシップを行った片島なつみさんが、素敵なお色のおアオザイ(ベトナムの民族衣装)を着て、プレゼンテーションを行って下さいました。片島さんの今回のインターンシップの目的は、支援する側と支援される側の相互の目的をどう達成しているか、また特に興味のある人材育成に関してどのような取り組みをしているかということを知りたいということでした。主な活動は、ガイドブックづくりの手伝いなどの観光関係、汚染状況を確認する環境調査、部品調達が行われる商談会に出席するなどの産業関係に分かれていたそうです。観光関係では、交通手段や食事の施設など細かいことを気にする日本人のニーズに合わせてガイドを作成するという事でした。環境調査の一環として行った模擬授業の見学では、環境モラルや将来を見据えた行動を子供たちに促しており人材育成が行われていると実感されたそうです。また日本人学生も環境のプロジェクトに携わっていることから支援する側も経験を積めるというメリットがあり、相互にとってプラスであると感じられたようです。インターンシップを通して支援の必要性和果てしなさや支援がニーズに合っていないことを改めて感じられたということでしたが、私もお話を聞いていてガイドブックづくりにしても支援にしてもニーズをよく見極めなければいけないと痛感しました。また片島さんは、明確な目的をもってインターンシップに行き、現地での課題、自分自身のキャリアプランやどのように国際協力をしていくかという課題なども見出していました。私はインターンシップというものについてまだ曖昧にしか考えていなかったもので、このことはとても刺激になりました。同時に、ただ行くだけではなく机上での知識をしっかりと積んでから目標を定めて行かなければならないと思いました。</p> <p>(GY7期生 佐藤 望)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2015/10/12	インターンシップ報告会 実施先: v-shesh(社会企業) インド	土屋 健太さん	埼玉大学 教養学部3年 (GY5期生)	<p>今回のBBセミナーではインドのチェンナイで3週間のインターンシップを行った土屋健太さんのお話を伺いました。土屋さんは主にV-sheshというソーシャルビジネスをしている企業で障害をもった人の高等教育ドロップアウトのデータの解析等に従事していたそうです。21,906,796(2001年)という数字はインドの障害者人口を表しており、全人口の約2%とおっしゃっていました。全人口の2%と聞くとさほど多くないという印象を受けますが、人口世界2位で12.52億人(2013年 世界銀行)を有するインドではその2%は決して無視してはいけない数になると感じました。V-sheshでは障害者の方々のために教育の場を設けているということでしたが、その教育は有料であり裕福な人しか教育を受けられていない現状が課題だとおっしゃっていました。私は、教育は平等であるべきだと思う一方で、企業にとっては経営していくことも重要であるのでこの課題は難しい課題だと思いました。国や州はV-sheshの事業に関与していないということだったので、国家や州がこのような問題に積極的に関わるようになると状況は変わってくるのではないかと思います。土屋さんは今回のインターンシップを通してインドの障害者教育の現状、ソーシャルビジネスの意義、Excel統計の重要性などを学んだそうです。私も有意義で得るものが多いインターンシップを計画していきたいと思います。また、土屋さんは貧困に陥っている人たちにご飯を提供するFood Driveというボランティアにも参加したそうです。このボランティアは地元で大学生が主体となって行っていたものだそうです。土屋さんが見た車でホームレスとなっている人たちの話や提供されたものを残しておいてあとから食べようとする子供の現状を聞いて、援助活動の重要性を改めて感じました。私もインターンシップの際には自ら積極的に動くことでインターンシップを密度の濃いものにしていきたいと思います。</p> <p style="text-align: right;">(GY 7期生 香田 祥真)</p>
2015/6/24	「Pray for Nepal: ネパール大地震被災地報告」	伊藤 ゆき氏	バルクマリ大学日本センター長	<p>2015年4月25日ネパールのゴルカという町を襲ったマグニチュード7.8の大地震。ある所ではマグニチュード9とも言われているようで、こんなにも大きな地震が起きたのは80年ぶりだと先生は言う。震災後の現地や人々の様子を見に行くために先生は5月の12日にネパールを訪れた際にちょうど余震が起き、車の中にいた先生はとても大きな揺れを感じ、5階建ての建物が目の前で倒れるのを見たそうだ。私にはとても想像できない発言であった。実際にはネパールの中央北区が震源地で世界遺産や世界で一番美しい谷と言われたランタン、13世紀頃の建物カトマンズ旧王宮はとても古く土やレンガでできており、建てる際のつなぎというものが無く、これら全てとても簡単に破壊された。世界遺産だという理由もあり、軍はとても丁寧に片付けていたという。ほりおこしも無理だと言われており、立て直しなどの計画はなくそのまま放置されているようだ。この災害による死者約8500人で、地震後もパニック死してしまう人も多々いる。日本からは200人の援助隊がかけつけ、一日10万円の資金と五つ星ホテルの宿泊がもうけられている。まず、被災者の食料、水、テントなどの寝床確保が必要である。災害により骨折などの怪我、不眠症などの精神病などの処置や対応も必要だ。被災者とのコミュニケーションのために通訳も雇用されていたが、間違った通訳も多々あったそうだ。便秘ではないのに便秘薬を与えていたり、逆にストレスを与えていたり通訳がとても大事であること、そしてなんといっても被災者の話を聞いてあげることの大切さを覚えたという。ネパールの人々は小さいころから避難訓練等の準備をしていないため、心構えもなく大きな恐怖心に襲われていた。ネパールの学校では美術、音楽、体育の教科がないため、自分の意思を思うように表現できないという部分もあり、また、女は赤やピンクと決まっている文化も存在している。こういった大変な時期に悲しみや苦しみを分かち合い、聞いてあげるだけでもどれだけの負担が減るだろうか。今この状況で現地の人々が何をすべきなのか、そして、私たちがしてあげられることは何か、この震災から学んだこともたくさんあると思う。ダーティン村という先生が昔住んでいた場所では家畜小屋が崩れ、山羊や牛等も死んでしまったが、現地の人々は同じ被害にあった者として食べずに葬ったそうだ。また、村人から5000円ほど集め、寝床もあり、電気も通り、3件に一つの共同炊飯所のある仮設住宅を建てた。この震災時のスローガンは、「後ろを向くな、前を向こう」そして「女性も稼げるように」と男女平等を示した。人々の絆は今まで以上に深まったであろう。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 長妻 美智子)</p>
2015/4/9	「Learning and Life Experience in Malaysia」 インドネシアからマレーシアに留学して	Mr. Fitriani Imaduddin	埼玉大学理工学研究科 人間支援・生産科学コース 特別研究生	<p>今回のBBセミナーでは、初めて海外の方のお話を伺いました。今回お話をしてくださったのは、Mr. Fitriani Imaduddin (フィトリアンさん) です。彼はインドネシア出身でマレーシアに渡り、マレーシア日本国際工科院(MJIIT)に在学しているそうです。そのため、今回はインドネシアについて少々、主にマレーシア日本国際工科院(MJIIT)に関して話をさせていただきました。インドネシアでは多くの人種、宗教、言語があり、プランバナン寺院などの古くからある建造物の紹介やインドネシアからマレーシアに渡った時の心境の変化や苦勞した事など、これからアメリカに留学する身として非常にためになる話を聞くことができました。MJIITについて、どのような授業、研究が行われているのか、写真や図などを多く用いて分かりやすく説明していただきました。MJIITが日本とマレーシアをつなぐ架け橋のように重要な役割を果たしていくことや、周辺の国々からの留学生がこの工科院に学びに来ていること、山口大学や東海大学と共同研究を行い、例えば電気自動車の研究をしていることなどを知ることが出来ました。日本の教授を派遣し、日本の高水準の教育を行っていくこととしていくことも知りました。実際に日本がマレーシアに学校を設立し、交流を深めていっている事例を聞き、国際協力の分野をもっと深く勉強したいと思いました。貴重なお話を聞くことができ、改めて教育の重要性と日本とのつながりを学び、考える良い機会になりました。これからの留学とその後のインターンシップに向け、日本の国際協力についてさらに勉強し、知識を養っていききたいと思います。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 野本香織)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2015/1/14	インターンシップ報告会 実施先:東ティモール国立大学工学部支援事業	長谷部 和彦さん	埼玉大学 工学部4年 (GY3期生)	<p>今回は、東ティモールの首都・ディリにて東ティモール国立大学工学部拡充計画「CADEFEST」というJICAのプログラムに参加した、長谷部さんから話を伺いました。東ティモールはテトゥン語、ポルトガル語などが話されており、人口の過半数が貧困層で、石油がGDPのほとんどを占めている国です。長谷部さんは現地で、秘書の方がポルトガル語から英語に翻訳したシラバスをさらに正しい英語に修正するなどの仕事をしました。秘書の方の英語訳は間違った文が多く、修正するのに苦労したそうです。学内には、内戦のときに焼かれ今もなお骨組みだけ残っている建物もあれば、JICAが建てた建物などもあり、あまり整った環境とは言えないのではないかと思います。使っていない機械が多くあったとのことで、使い方が分からないのか必要がないのか定かではありませんが、どちらにしろ支給された意味がなく勿体無いと感じました。為になるお話ばかりでしたが、私がお話の中で一番興味を持ったのは、長谷部さんが現地の学生に行ったアンケートです。工学部の学生100人のうち、62人がパソコンを持っており、家にインターネットを接続しているのは7人でした。インターネット利用時に使用する言語は、英語が42人、インドネシア語が31人、ポルトガル語が22人、テトゥン語が5人という結果でした。工学部でもパソコンを持っていない学生やインターネット接続をしていない学生が多く驚きました。また、公用語がポルトガル語であるのに、あまり利用されていないというのも興味深かったです。100人にアンケートを取るというのは簡単なことではないと思います。私も来年か再来年にインターンに行きますが、長谷部さんを見習って頑張りたいです。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 杉原 睦子)</p>
2014/12/3	インターンシップ報告会 実施先:JICAスリランカ事務所	山形 和史さん	埼玉大学 経済学部3年 (GY4期生)	<p>今回は、JICAスリランカ事務所にてインターンシップを行った山形和史さんのお話を伺いました。山形さんはスリランカの最大都市であるコロンボに滞在されたということです。コロンボ市内の電化率は100パーセントと高く、比較的不便のない生活を送る事ができるということですが、一方で北東部などではほとんど電気が通っていない場所があるということ、地域差を感じました。山形さんは、JICAスリランカ事務所水質汚染の視察、電力管理局の訪問、道路建設現場の視察、廃棄物処理場の視察、青年海外協力隊とSATREPSプロジェクトの参加を二週間のうちにされたとのことでしたが、とても多くの密度の濃い経験をされたのだと感じました。水質汚染の調査ではケラニ川を主に取扱ったとのことでした。調べてみたところ、ケラニ川はスリランカで4番目に長い145kmの川で、農業をはじめとして人々の日常生活に深く関わっている川です。経済成長にもなって汚染が目立つということで、経済成長と環境保全のバランスが大切な分野だと思いました。山形さんも会議に参加されて環境基準の採用や機材給与についての話し合いをされたとのことでした。道路建設現場の視察では、渋滞がひどいコロンボ市内の道の問題点が挙げられていました。人々はあまり有料道路を利用しないということで、あまり使われない有料道路だけが存在しているというもったいない状況を知りました。青年海外協力隊では、ゴミの分別の推進と環境教育、そしてコンポストの普及についての活動をされたそうです。ゴミの分別は、生ゴミとそれ以外で分けることを行い、現地の方はゴミの分別を日本よりも熱心にされている様子が見られたそうです。コンポストとは、バケツの中に生ゴミを入れて分解し、肥料として利用できるようにする方法のことで、生ゴミの量を減らすために行われています。スリランカは北海道の0.8倍ほどの国土のわりに人口が多いため、ゴミの処理場うまく機能していない状態で、ゴミの排出量が深刻な問題になっています。ゴミの排出が多いのを利用して、コンポストで簡単に肥料に変える解決策は良いと思いました。SATREPSプロジェクトとは、JSTとJICAが共同研究を行っているプロジェクトで埼玉大学も参加しています。JSTとは大学等の国内研究機関への研究支援を行う独立行政法人科学技術振興機構です。このプロジェクトでは、スリランカ廃棄物処理のガイドラインの作成を行ったそうです。スリランカの大学でのミーティングで多くの現地の大学生とお話される機会があったということで、学生の将来までプロジェクトがつくっているという素晴らしい面があることを知りました。今回の山形さんのお話では、山形さんの多方面への知識の豊富さに驚きました。私も、インターンシップをする際には興味を持ったらずぐに質問し、自分から積極的に内容を深めていきたいと思いました。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 塚田 咲子)</p>
2014/11/28	インターンシップ報告会 実施先:ECOSS:シッキム州環境保全NGO(インド)	武井 紗也子さん 石井 有希さん	埼玉大学 教養学部3年 (GY4期生)	<p>今回のセミナーはインドにのシッキム州でエコツーリズムに参加した先輩方のプレゼンテーションであった。エコツーリズムとは主に観光業、自然環境保護について学ぶそうだ。先輩方のプレゼンテーションは訪問した際に感じた事などを報告していた。インドはどの人たちにも英語が通じるということであったが、現地の言語も強いということであった。また、迎え入れてくれた人たちがシャイであるということについては、まだ受け入れる人たちが慣れていないことや、宗教的影響も強いのではないかと思った。テミティーガーデンでは食事がすべて有機野菜でお茶がとてもおいしかったという。エコツーリズムというだけに、出来るだけ自然環境を壊さないように栽培から肥料などについて配慮したり、土を大事にしたりする姿勢を感じ取る事ができた。とくに印象的だった事は、現代性(利便性)と伝統性(旧式)との優先性である。利便性を求める事は、環境の問題を引き起こす事にもなり、伝統性を重んじると不自由さを感じてしまい、快適に過ごせるかどうかの問題である。しかし、話の中で「楽しく生きる」ということがあった。環境に配慮(リサイクルなど)を当たり前のように感じ、不自由さも不自由と感じなくなることが、エコツーリズムにとって重要なことだと思った。また、国民の習慣性について「spitting」が多く見られたということであったが、その様子は決して心よく思うものではなく、改善されるべき問題だと感じたということであった。インドの人口やグローバル社会を考えると、今の中国にも見られるような問題がこれから多く出てくるのではないかと考えた。</p> <p style="text-align: right;">(GY6 長妻 美智子)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2014/11/17	インターンシップ報告会 実施先:福祉施設(ベトナム) CIEE海外ボランティア	清水 恵太さん	埼玉大学 教養学部3年 (GY4期生)	<p>UNESCAP(国際連合アジア太平洋経済社会員会)が発行する“Disability at a Glance 2012”によると、ベトナムの5歳以上の障害者は650万人であり、5~15歳が17.9%、16~59歳が32.6%、60歳以上が49.5%となっている。今回、清水先輩は障害を持つ児童のための学校でボランティアをされたということで、5~15歳に限定して我が国と比較してみると、ベトナムがおよそ116万人、日本がおよそ9万人である。この愕然とした差は何故生まれたのだろうか。セミナーの中で辻教授がベトナム戦争の影響について言及されていたが、今から約50年前に始まったこの戦争では米軍によって枯葉剤が大量に使用され、これは健康被害や環境被害、そして出産異常を引き起こし、戦後ベトナムの人々を苦しめ続けることとなり、その結果ベトナムには今も日本の10倍以上の障害児が存在しているであろう。今回清水先輩が活動された学校にも少なからずこの影響を受けてしまった子がいるのかもしれないと思うと、子供たちの幸せを願うばかりである。ベトナムには“Volunteers for peace Vietnam”という地域発展の為に国内外からボランティアを斡旋する団体があり、先輩が派遣されたのは“Phuc Thu Caring Center”という施設だった。この施設は近隣の同じ類の施設と比較すると、どうやらあまり裕福でない家庭の子供達が通うところだったという。先に述べたように、ベトナムには障害児が数多くいる。確かにベトナム戦争は暗い歴史だが、この戦争によって生み出された犠牲者は今も生きているのである。私は今回のセミナーに参加して、この事実をきっかけとして障害者の社会進出に強い国になって欲しいと思った。弱味は強味に変えることができる。これからのベトナムの発展に注目するばかりである。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 入江 美樹)</p>
2014/11/14	インターンシップ報告会 実施先:JICAベトナム事務所	小林 暉さん	埼玉大学 経済学部3年 (GY4期生)	<p>JICAのベトナム事務所にインターンシップへ行ったGY4期生の小林 輝からお話を聞かせていただきました。ベトナムについての基本的な知識や日本がベトナムにとってどのような存在なのか、2国間の関係性など今まで知らなかったことがたくさんあり、自分の知識不足に改めて思い知りました。今までいろいろな先輩方のインターンシップの体験談を聞かせてもらっていますが、今回の小林さんの行ったJICAのベトナム事務所では、仕事で日本人と接することが多く、また、途上国でのボランティアとは異なり、実際に職場の現場で活動されたということでした。今までの私のインターンシップのイメージは発展途上国へ行き、開発援助の現場をみたり、ボランティアをして現地の人たちとたくさん触れ合うものなのかなと思っていました。さらに先輩もおっしゃっていましたが、現地の国に行けば何かしら自分に仕事・やる事が割り振られるだろうと思っていました。でも実際は何をやりたいのかを聞かれ、具体的にこれがやりたいと思うことを決めることが大事であると知りました。実際の職場で好きなことを自由にやっていると聞かれて、何がしたいのだろうと考えてしまうことなく自分のやりたいことを決めてそれについていろいろな知識や実際の状況などを学ぶことが必要とされるんだなと思いました。また、開発援助について学ぶ上で工学的な知識が必要だとおっしゃっていたので、私は全くと言っていいほど工学部が扱っているような知識を持っていないのでどんどん勉強しようと思いました。インターンシップへ行くときに、行く国のことだけでなく会社のこと事前学習で学ぶことと積極性が非常に重要だと知ったので自分のやりたい分野を決め、インターンシップへ行く前に事前学習をしたいと思います。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 野本 香織)</p>
2014/11/3	インターンシップ報告会 実施先:v-shesh(インド)	川嶋 久美子さん 津田 賢汰さん	埼玉大学 教養学部3年 埼玉大学 工学部 3年 (GY4期生)	<p>今回は、インドのチェンナイでインターンシップを行ったGY4期生の川嶋久美子さんと津田賢汰さんのお話を伺いました。お二人のインターンシップ先はv-sheshという会社で、そこでは社会から取り残された人(特に障害者)のために、就職の支援を行っているそうです。具体的な流れとしては、まず候補者のカウンセリングや顧客探しをしたあと、職業トレーニングを行います。数学、英語などの研修のほかに、マナーの研修、面接練習などを行い、就職活動に必要な知識や能力を身につけます。無事就職に成功したあと、企業と連絡を取り、フィードバックや障害者のための環境整備、理解を促します。私は、トレーニングの内容が充実しており、また就職後の対応もあることから非常に良いシステムだと感じましたが、実際には聴覚障害者以外の知的障害者などへのサポートは万全ではなく、まだまだ課題があるとのことでした。お二人はv-sheshで、聴覚障害者への社会の理解を促すプレゼン作り、アンケート集計、ビデオ編集などのお仕事をされたそうです。また、お二人はホームステイも体験したとのこと、滞在中に様々な経験が得られて非常に羨ましく感じました。津田さんは、お仕事をすることで、相手を理解することが非常に大事だと感じたとおっしゃっていました。また川嶋さんは、事前学習が足りずに質問されても答えられないことがあったそうです。私自身、障害についての知識が乏しく、障害を持った人たちへの理解も足りないだけでなく、日頃から他人を理解しようという気持ちが薄いように感じます。海外の情勢についても日本の情勢についても十分な知識は持っていません。今回のお話を聞いて、自分の足りない点を改めて見つめ直すことができました。先輩方のお話を聞くだけで終わらせるのではなく、きちんと自分のインターンシップ先での活動に活かしたいと思います。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 杉原 睦子)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2014/10/28	フィリピン・セブ島からの研修生に聞く「埼玉・セブものづくり人材育成事業」	(サンホセレコレス大学工学部) Mariah Jessa C. Enadさん、 Robert Ivan P.Inocandoさん、 Cris Lawrence B. Laurenteさん、 Junry Y. Romaさん(サンカルロス大学工学部) Maria Pamela I. Beltranさん	サンホセレコレス大学工学部、 サンカルロス大学工学部	<p>今回のBBセミナーは、フィリピンのサンホセ・レコレス大学とサンカルロス大学の教員の方と大学の学生の方を招いて、埼玉セブものづくり草の根技術協力事業についての公演でした。埼玉セブものづくり草の根技術協力事業とは、埼玉県庁が中心となってJICAに申請され採択されたもので、昨年(2013年)11月より2015年度までの2年半にわたって実施される事業です。この事業では日本の製造業の進出先としても注目されているフィリピンの学生を日本に招き、日本のものづくりに係る考え方や技術を伝えることを目的としています。その日本側メンバー機関として埼玉大学が参加しています。サンホセ・レコレス大学とサンカルロス大学は、セブ島に立地しています。セブ島は観光地としても有名ですが、そのセブ島の素晴らしい場所の数々をスライドショーで見ることができました。そこには、伝統的な建物やアマゾンのような森があれば、近代的な建物やきらびやかな夜景もありました。私の知らなかった場所にそのような豊かな景色があることに驚きました。そしてセブ島からいらした学生さんもセブ島の素晴らしさを私たちに全身で教えてくださり、日本が伝えるだけでなく、私たちが教えていただくことが沢山あるように感じました。フィリピンの大学の様子は、パソコンなどの設備が整っていたり様々なエンターテインメントが存在していたりと、学生が学ぶ環境が整っている印象を持ちました。また、これからのものづくり事業を進めて行くにあたっては、様々な革新と環境を守っていくバランスをどのようにしてとっていくかが大切だと感じます。そして最後にはフィリピンの音楽にのせてダンスと歌を披露してくださいました。日本にいてインターネットや本を読むだけではわからないことを体や空気で感じることができました。これからフィリピンと共に事業をして行く中で、それまで存在していた良いところを崩さずに、日本の誇れる技術を伝え、共に成長していきたいと思いました。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 塚田 咲子)</p>
2014/10/24	インターンシップ報告会 実施先:東ティモール国立大学工学部支援事業	白戸 文規さん	埼玉大学 経済学部 3年 (GY4期生)	<p>東ティモール民主共和国の首都、ディリにある唯一の国立大学の工学部に2週間、JICAプロジェクトに参加していた白戸さんのお話は今まで聞いたインターンシップの中では経済面や環境面で恵まれている地域だと感じた。プレゼンの中では貧困や汚染問題がなく、他の先輩方より良い生活をしていて勝手に想像していた。都内に滞在していたという理由もあるかもしれないが、4つもの言語を話す国で自らの母語も通じず、ましては英語もともに使えない場所でもとも苦労はあったと思う。彼の主な仕事内容は大学の論文等の翻訳や会計報告、JICAが支援している建物や学内探索であった。翻訳では現地の秘書がポルトガル語から英語に訳したものを再び正當な英語に書きかえるという彼自身とても大変な仕事だと言っていた。辞書を片手にもちながら複数の言語に矛盾を感じ、頭の中が混雑していたはずだ。会計報告は彼自身がやりたいと思っていた仕事でもともやりがいがあったと思う。学内探索のお話が私の中で一番印象に残っている。まず、彼が聞いた現地の大学教授のレクチャーは、論文の書き方やプレゼンする方法など日本人からしてみればとても基本的な事を現地の人々はびっくりしていたと言う。また、東ティモールでは時間を守らない人が山ほどあるらしく、日本では絶対に許されないことだ。現地語で「明日」は「未来」をも意味するので、提出期限なども明日ではなく未来のいつかというように捉える事ができるので、これも言葉の矛盾が生じる。また、現地の教授の仕事に対する意識がとても低く、とくに中年の教授は人数合わせのため、仕事に対するやる気が見えず、教育面にも問題があると感じた。最後に、日本では当たり前のことや習慣が東ティモールでは珍しかったりあり得ないことで、東ティモール民主共和国の人々と日本人では価値観が全く違うと感じさせられたプレゼンであった。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 長妻 美智子)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2014/10/20	インターンシップ報告会 実施先: JICAインド事務所 インド	佐藤 智亜樹さん	埼玉大学 経済学部 4年 (GY3期生)	<p>開発援助という、たまに目にするテレビのドキュメンタリー番組でお笑い芸人さんなんかボランティアとして途上国に派遣され、そこで四苦八苦しながら生活する様子を感動的に映し出しているイメージが強い。今回、佐藤先輩のお話を聞いて、私はあのような類の番組は多少誇張されていてもあながち間違っていないのかもしれないと思った。おそらく私ならそこで暮らすというだけで精一杯だろうに、働き、課題を見つけ、解決の道を探っていくというのは相当の体力、精神力を要するだろう。果たして2年後、同じように私は自身のインターンシップを乗り越え、後輩にプレゼンテーションすることができるのだろうかと不安に思いながらも、同時に「よし、先輩を超えてやる！」と後輩の特権とも言うべきようなことを考えていた。プレゼンの中で「ファシリテーション」という言葉がでてきたが、この意味を聞いたとき私はソクラテスの「問答法」を思い出していた。問答法とは、相手に質問をし続けることで相手の主張の矛盾点を自覚させ、理想の論理にむけて誘導していくという方法だが、これは「ファシリテーション」に酷似している。まさか古代ギリシア哲学が現代も通用するとは思ってもよらなかった。このコミュニケーション能力は、指導者の立場にいるのであればそれがどの業種であろうと必要な能力だと思う。なぜなら人達の自主的な活動を促し、かつ問題解決の道へと導くことができるこの方法は援助する側とされる側の双方の利益につながるのだから、途上国の開発援助には必要不可欠だ。世界第2位、いずれは世界の人口を誇る大国となるインドの人口分布は綺麗なピラミッド型である。国を担うリーダーに対し、国民が圧倒的に多いこの国では貧困問題を筆頭として、男女問題、カースト制度の問題、国際問題など多くの解決困難な問題を抱えている。その中で地道ではあるものの、ほんの少しずつその環境が改善されていくのであればJICAをはじめ、多くのNGO団体の存在意義はあるのだろう。しかし人達にその気がなければいくら我々が協力を申し出たとしても私たちは無力である。今日、私はそれらの問題を解決していく一つの希望がみえたような気がする。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 入江 美樹)</p>
2014/10/15	インターンシップ報告会 実施先: NICE(国際ボランティア) フィリピン	諏訪 茜さん	埼玉大学 教養学部 4年 (GY3期生)	<p>GY3期生の諏訪茜さんから、今回、NICE(国際ボランティア)についてのお話を聞くことが出来ました。諏訪さんが国際ボランティアとして行った場所はフィリピンの北西部に位置するMedellinという場所で、11日間活動されたそうです。国際ボランティアとしての活動は台風で吹き飛ばされてしまった施設を立て直すといった労働作業を日中に行ったとおっしゃっていました。また、諏訪さんが現地に行って目にしたことの中で各家庭の格差が激しいということに驚きました。高い車を保持している家庭がある一方で、出会った何人かの子供たちは路上の公衆トイレで夜を明かしているということ、また、学校に通うことのできる子供たちと学校に行けず毎日同じ服を着ている子供たちがいたということは、まさに激しい格差を象徴している現実であると強く衝撃を受けました。一方で諏訪さんは、現地で出会った子供たちはみんな楽しそうに生きていて、学校に行けないことは彼らにとって当たり前なことでも全然気にしている様子は無かったとおっしゃっていました。当たり前になっているほどずっと前からその地域では格差があるのかなと思いました。教育を受ける機会があるかないかで子供たちのその後の将来が大きく異なることも知りました。私たちは教育を受けることが当たり前で、高校、大学や大学院まで行って勉強する機会がありますが、今回のお話を聞いてその豊かさを改めて考える機会になりました。さらに、国際ボランティアを通じて得るものは参加者一人一人で違うことも知りました。私は国際ボランティアに興味がありますが、実際の体験談を聞くと行きたい国のことをもっと知り、自分がどのような志を持って何を求めるために参加するのかをしっかりと考えなければいけないと強く思いました。今回このような貴重な体験談を聞くことが出来、もっと具体的に自分のこれからの計画を考えていこうと思いました。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 野本 香織)</p>
2014/10/3	インターンシップ報告会 実施先: JACリクルートメント インドネシア	程原 秀明さん	埼玉大学 経済学部 3年 (GY4期生)	<p>今回のBBセミナーでは、GY4期の程原秀明さんから、JACインドネシアでのインターンシップの体験を聞くことができました。こちらの会社は、インドネシアの企業と現地で職を探している候補者とをつなぐ人材紹介会社だそうです。程原さんはそこで、名刺データやメルマガの作成などのルーティンワークと、候補者の面接練習の同行や企業の人事の方との話し合いなどを行ったそうです。ビジネスマナーや英語の丁寧な表現など、仕事に必要な知識がないと苦労するとのことなので、私もこれからきちんと身につけていきたいです。お話の中で、自分たちが紹介した人材と人事の方が求める人材との間に違いがあることに気づき、クライアントと対話することの重要性を実感したとおっしゃっていました。その企業に合った候補者を見つけ出すためには、企業が本当に必要としている人材がどんなものかをきちんと理解しなければならず、難しいお仕事なのだなぁと感じました。他にも、インドネシアの紹介や、インターンシップ先での仕事内容など、興味深いお話をたくさんしてくださいました。私はインドネシアの知識が乏しく、またインターンシップについてもまだちゃんと考えていないので、今回のお話はとても新鮮で勉強になりました。私も程原さんのように目的を持ってインターンシップに参加し様々な発見を得られるよう、今のうちから自分が何をやりたいのかを考えていきたいと思います。</p> <p style="text-align: right;">(GY6期生 杉原 睦子)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2014/7/24	アフガニスタンからの 埼玉大学留学生に聞く JICA未来への架け橋(PEACE)プロ ジェクトで来日	Mr.Samander Salihi	埼玉大学理工学研究科	<p>Mr. Samandar Salihi (以下サマンダールさん)はアフガニスタンから埼玉大学への留学生として構造力学を学びに来ているようです。彼はアフガニスタンで起こった市民戦争により、パキスタンへ逃れたという経験があるようです。サマンダールさんは2011年にはJICA未来への架け橋(PEACE)プロジェクトの奨学生として日本に来ました。JICAのこのプロジェクトでは毎年100人もの農業・農村開発分野の人々を日本に送っているようです。日本がアフガニスタンに対して行っていることとしては、インフラの整備や文化・安全・教育・健康などにおける援助・補助、さらには農地や地方の発展の援助などがあげられます。先に挙げたJICAのプロジェクトでアフガニスタンからの研修員を受け入れ、人材育成を行うことも、日本の役割としてあげられます。戦後、アフガニスタンの主要な都市や大学をはじめとする学校、歴史的遺跡などの再構築が進んでいます。そして新たに教育やコミュニケーション網、さらにはメディア媒体などの発展も見られます。現在は、新たな原料であるCopper(銅)の開発も始まっているようです。サマンダールさんが移民としてアフガニスタンから逃れてきたという経験があると聞き、そうした経験を持つ人のお話を聞く機会はこれまでになかったので、とても興味深かったです。それには大変な苦勞を伴っていたようですが、実際に経験していない私たちにはその大変さは到底計り知れないものであると思いました。また、戦争により、インフラの再構築や教育などの普及が今でも急がれているという現状はとても深刻だと思いました。こうした状況ではやはりJICAなどの公的機関に頼らざるをえないのだと思います。サマンダールさんのように国境を越えて日本で研修をして帰っていくなどというプログラムはこれからも大切になっていくと思います。留学も国境を超えることによって自国では得られないものを得て帰っていくというプログラムであり、世界のグローバル化が進んでいるなかでは、こうした国境を越えた取り組みが大切になると思っています。留学を控えた今、国境を越えて活躍する人たちのお話を聞くことがとても励みになります。自分も何らかの形で日本と世界をつなぐ役割を果たせたらいいなと思います。</p> <p>(GY5期生 岡部 優)</p>
2014/7/3	マレーシアからの インターン生に聞く	Mr.Abudullah Affan bin Khalid  Mr.Muhammad Fitri bin Yahya	マレーシア国際工科院 (MJIT) 埼玉大学工学部 機械工学科インターン生	<p>今回のBBセミナーでは、マレーシア日本国際工科院(MJIT)の学生である、アフアンさんとフィットリさんのお話を伺いました。お二人はインターン生として埼玉大学で機械工学を学んでいるとのことでした。MJITはマレーシアの首都クアラルンプールに設立され、マレーシアにおいて日本型の工学系教育を発展させるために設置されました。また、マレーシアは「東方政策」として日本及び韓国の成功と発展を学び、取り入れる政策を実施しており、このMJITもその一貫です。学内には日本人教諭も指導しており、ますますマレーシアとの関わりも強くなっていることを実感しました。私はちょうど今、マレーシアの教育について調査しています。東南アジア諸国内においてもマレーシアの高等教育の水準は高く、英語教育も力を入れています。国全体が教育に対して相当な力を入れており、その結果として首都を中心に経済発展が進んでいると考えられます。彼らのお話からも、質の高い教育を受けていることを感じましたし、また、自分たちの学びに誇りを持っているようにも感じました。私もこれから留学とインターンを控える身です。留学についてはもう残すところ一ヶ月程です。留学先で何を目的として過ごすのか、どんなことに挑戦するのか、大方決まっています。がしっかりと実践していきたいと思いました。最後に、アフアンさんとフィットリさんは学部生ということで、私と同年代です。今回のセミナーで彼らの発表はとても勉強になりました。マレーシアでどのようなことを学んでいるかなどを知ることができました。私は工学とはかけ離れた存在ですが、彼らは想像以上に高度な教育を受けていました。また、その教育に日本が大きく関わっており、それについても非常に喜ばしいことと感じました。</p> <p>(GY5期生 吉村陸)</p>
2014/6/27	「開発コンサルティング会社と 国際協力の現場」	武藤 正樹氏 松本 幸敏氏	アイ・シー・ネット株式会 社	<p>今回のBBセミナーでは、開発コンサルティング会社であるアイ・シー・ネット株式会社さんのお話をお伺いすることができました。アイ・シー・ネットさんはコンサルティング事業・海外ビジネス支援事業・研修事業の三分野で活動しており、今回はコンサルティング事業についてのお話でした。開発コンサルタントとは、途上国が他国政府に援助を要請し、外務省が受注して、JICAなどが請け負ったものを現地で実際に実施する、いわば下請けの仕事のようなものであるようです。セミナーでは、国連、NGO、開発コンサルタント会社の三つを経験しておられる方にお越しいただき、それぞれのこと・できないこと、メリット・デメリットについて大変参考になるお話をしていただきました。アイ・シー・ネットさんは、学校や道路を作るなどのハード面ではなく、教育や医療、農業、観光業など、つまりソフト系と呼ばれる様々な分野についてを専門としているようです。ハード系と違い、ソフト系は形として残るものではありませんが、途上国の開発においてはとても重要なものです。地域に関しても、フィリピン、ナイジェリア、ドミニカ共和国といったように、世界のあちこちで活動をしているようです。会社のモットーとして教えていただいた、「困っている人たちがいて、自分たちにできることがあるなら、それがどこでも、なんでもやる」という言葉がとても印象的で、感動しました。今後、途上国の開発を進めていくためには、このような高い志をもって取り組んでいかなくてはならないのだなと改めて思いました。</p> <p>(GY5期生 土屋健太)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2014/4/24	「はじめての後発開発途上国 ラオスで考えたこと」 —JICA大学生フィールド・スタディ・ プログラムに参加して—	加藤 みつきさん	埼玉大学 経済学部 2年 (GY5期生)	<p>同期であるGY5期生から初めてのプレゼンターで、何となく不思議な感覚を覚えました。ラオスでの自らの体験を語る加藤さんは本当に生き生きとしていて、わたしは彼女の話にどんどん引き込まれていきました。彼女がこの春に行ったラオスという国は、開発途上国の中でも最も下位の位置づけである後発開発途上国に分類されます。ラオ語という独自の言語を話し、約49の民族からなる多民族国家であり、社会主義国である印が国中のいたるところにあるそうです。一見日本とは何の関連性もない国のように思われますが、ラオスと日本の関係は意外と深いものがあるという話には驚かされました。二国間援助では、日本がラオスのトップナーであり、また日系企業が多く進出している場所でもあるといえます。加藤さんは18日間のプログラムで、首都ヴィエンチャンでの現地NGOの訪問から始まり、農村部でホームステイをしながらのフィールド調査を行っていました。私が加藤さんの話の中で最も印象的だったのは、現地の病院についての話です。ラオスの病院には、途上国支援の一環で支給された外国の最新の医療機器が置いてあるにも関わらず、英語で書かれた説明書が読めず機械を正しく使えないので、宝の持ち腐れ状態であったということです。しかも病院という、衛生面が一番確保されていなければならない場所であるのに、衛生状態は良いとは言えないものだったようです。ラオスにも医師を養成する学校はあるけれど、レベルはそれほど高くないので一般市民からの信頼も薄く、お金を十分に持っている人は首都のヴィエンチャンの一部の病院か、ラオスから飛び出してタイの病院に行ったりするといえます。私はこの話を聞いて途上国での生活基盤の整備が急用課題であるという話は本当のことであるのだと知りませんでした。加藤さんがこのラオスでの滞在で感じたことの一つに“様々な立場の人から意見を聞くことが必要なことである”ということがありました。本当のニーズはどこにあるのか、それは支援をする側のわたしたちだけで話し合っているだけでは見つかるはずはありません。だからと言ってラオス側の要望を鵜呑みにして支援をするわけにもいかないでしょう。当事者同士の意見と第三者の視点をうまく取り入れつつ援助の取り組みは進められていくべきだと強く思いました。</p> <p>(GY5期生 片島なつみ)</p>
2014/1/14	「国際協力の現場で感じたことと キャリアパス形成」	丹澤千草氏	JICA専門家	<p>今回のBBセミナーでは、JICA専門家の丹澤千草さんのお話を伺うことができました。今回のお話のテーマは、「国際協力の現場で感じたこととキャリアパス形成」ということで、国際協力の現場経験が豊富な丹澤さんから非常に貴重なお話をたくさん聞かせていただきました。丹澤さんは2歳の時に家族でブラジルへ移住し、そこから15年間ブラジルに住んでいたそうで、それがご自身の国際協力への興味のきっかけになったと伺いました。日本の大学を卒業後、海外留学を経験し、その後様々な国際協力の現場へと行かれたそうです。IDBインターン、外務省の国際協力インターン、リオ総領事館専門調査員など数々の現場を体験されたということで、私たちにはそれぞれの現場の様子や特徴、現場からしか見えないことなど貴重なお話をしてくださいました。その中で、国際協力をする上で困難なことについて、1年～2年で異動になるという不安定なキャリアであること、採用は非常に狭き門であること、かなりの体力勝負であること、適応力や専門性が非常に重要視されるということを挙げてくださいました。一方、魅力については、自分の好きなことを仕事にできること、海外で現地の人と共に働けること、ハイレベルな仕事で充実感を得られること、そして、世界中どこでも無限に仕事があることなどを挙げてくださいました。今回のお話を通して私が学んだことは、国際協力に関わる人材になるためには、語学やコミュニケーションスキル、創造性や柔軟性、そして何よりも覚悟が必要だということです。また、やりたいことに自分からアプローチしていくことの大切さを痛感しました。丹澤さんも、国際協力に関わるためには自分からチャンスを掴みに行かないといけない、とおっしゃっていましたが、まさにその通りだと感じました。国際協力に限らずすべてのことに通じると思いますが、自分から動くという積極性をもっとつけていくことが必要だと感じました。</p> <p>(GY5期生 笹生彩)</p>
2014/1/10	インターンシップ報告 実施先:NICE(国際ボランティア) ミャンマー	藤井健司さん	埼玉大学 教養学部 4年 (GY2期生)	<p>舗装が行き届いておらず、がたがたの道を通る夜行バス。およそ10時間バスに揺られるに揺られ、その後ボートを乗り継いで…といった形でワーク実施地であるミャンマーのpayartaung村へ向かったのは藤井健司さんでした。中国、タイ…とアジアの生産拠点が変遷していくなかで、今日次のフロンティアとして最も注目を集めている国の一つがミャンマーです。藤井さんはワークを通して日本語、英語を教える活動など様々なことに取り組みされたそうですが、なかでも印象に残ったことはやはり、建設事業のことでした。かんかん照りの空の下での新しい道路の開拓事業では現地の方が木を切り倒したうえでワーク参加者のかたが鍬などを利用し、道を平らにしたそうです。今回「アジア最後のフロンティア ミャンマーでの14日間」という表題でお話を伺いましたが、揺れが激しいがために車内で一睡もできないような現在の道路状況の国へ今後日本企業も次々と参入していくのかと考えたら、その道のりは決して平坦ではないように感じられました。</p> <p>他方で藤井さんの出会ったミャンマー人の方々には仏教の教えのもと、「あるもので充足している様子だった」そうです。日本にはあるものがなく、日本にはないものがあり…データを見るだけではいつも何か足りないと言られるような国であっても、それは外部から見たときの印象であり、内側からの視点というのは非常に見えづらくしかし大切だと考えました。また、内側からはかえって見えにくい外部からの視点も必要で、衛生面での課題を村長さんに伝えた藤井さんのように、訪れた場所で何か提言を出せるように、そして内実を見抜けるように、今後ますます勉強していきたいと思えるインターンシップ報告でした。</p> <p>(GY5期生 加藤みつき)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2013/12/9	「固定観念を捨てろ！ 僕がオーストラリアで養ったもの」	高塚雄一氏	さいたま日豪協会代表/ 市民活動家	<p>今回のBBセミナーでは、さいたま日豪協会代表であり、市民活動家としてご活躍されている高塚雄一さんに、ご自身の豊富な経験に基づいたお話をしていただきました。高塚さんは新聞配達をしながら大学へ通うという苦学生を経験し、卒業後は就職活動を行わずイタリア料理人を目指し修行を積んだ後、安定したホテル業に就きたいという気持ちから、ホテル学校のあるオーストラリアへの留学を決意されたそうです。オーストラリアでは、多くの留学生との交流を通して、日本人に比べて発展途上国からの留学生にとつての渡航の難しさや、自身の黄色人種としての白人からの差別など、人種や出身国の違いによって生まれる環境の変化を目の当たりにされたということでした。途上国からの留学生の中には、出身国の治安の不安定さからオーストラリア永住権獲得を目的として大学院に通う人も多いという事実には驚くとともに、普段はあまり馴染みのない移民問題の難しさを私自身強く感じました。また、世界で活躍することを目指すにあたっての心構えを教えてくださいました。自分の行動範囲を狭めてしまうような固定観念は捨て、国際的な基準に柔軟に対応することや、あらゆる場面において「絶対」ということはあり得ないため、簡単に諦めず、努力を継続することの大切さを改めて感じました。そして、特定のコミュニティに固執せず、幅広い人脈を作り上げることが、英語でのコミュニケーション能力や母国に関する知識と同様に、海外で活動するにあたって重要だということも教えて頂きました。私も今後、ふとした時のチャンスや新たな試みへのきっかけを見失わず挑戦していけるよう、柔軟な発想や知識を身に付けていきたいです。</p> <p>(GY5期生 齋藤綾の)</p>
2013/12/6	インターンシップ報告 実施先:日本工営株式会社 フィリピン	菊池 匠さん	埼玉大学 教養学部 3年 (GY3期生)	<p>今回のBBセミナーではフィリピンの日本工営-ARISP事務所でインターンシップを行ったGY3期生の菊池匠さんのお話を伺いました。首都マニラの北東に隣接するケソン市がインターン先だったそうです。こちらの会社では海外コンサルタントの事業を手掛けており、途上国における都市計画や運輸交通計画の推進、農業におけるインフラ整備、さらに紛争や地震や津波などによって被災した地域における復興支援などを行っております。ARISPとはAgrarian Reform Infrastructure Support Project(農地改革基盤支援事業)のことで、現地住民の農業における生産と所得の向上を目的としており、具体的には農業生産基盤の整備、農民組織の育成と強化、農業関連施設の拡充などを指します。農民参加型・コミュニティ密着型の理念の元、フィリピン政府機関と連携しながら事業を行っているそうです。菊池さんは実際にインフラ整備が計画通りに行われているかのモニタリングとして道路の舗装工事の視察や、自治体・組合が機能を発揮するために、それらを作る意義・必要性を話し合う会合に参加されたそうです。インターン全体を通して、コミュニケーション能力が事業を円滑に進めるうえで必要不可欠で、自分の立場や言い分を分かち合ってもらえる、周りとの関係を良好にする手段であると学んだとおっしゃっていました。また日本人からすると考えられないような価値観の齟齬もあり、考えさせられたとおっしゃっていました。インターン中に行かれた首都マニラは信号機がほぼ無いにもかかわらず渋滞や混乱などはあまり見られなかったそうですが、やはり交通量が多く、バイクにノーヘルメットで3、4人乗りしているのを見たことと、振興途上国の一面も確認されたようです。私は今回の報告会で異文化の人と関わる際には相手を認めて受け入れ合うことの大切さ、そして日本の技術が途上国で役立っていることの誇らしさを感じました。</p> <p>(GY5期生 遠藤紗織)</p>
2013/11/26	インターンシップ報告 実施先:JICAインド事務所	多筈 大暉さん	埼玉大学 経済学部 3年 【GY3期生】	<p>今回のBBセミナーではJICAインド事務所でインターンシップを行った多筈さんのお話を聞くことが出来ました。多筈さんが携わった業務の一つでデリーメトロという地下鉄網の工事現場の視察があったそうです。インドでは人口の増加や自家用車の普及による大気汚染が問題になっており、それらを改善するためにデリーメトロの開発が推し進められているようで、開発には外資系企業も多く参入しており、特にジョイントベンチャーが多くみられ国外からの注目の高さが窺えます。駅構内の設備も日本と比べて遜色がありませんが、実際工事現場に行ってみると作業をしている大抵の人はきちんとした格好をしていたが中にはヘルメットも靴も履かずに作業を行っている人もいて、安全面で若干不安に思うところもあったそうです。また利用者にインタビューを行ってみると、運賃が安いことや病院などの公共施設に容易に行くこともできるため高い評価を受けているようです。しかしまだまだ行き届いていないところもあり、例えばフィーダーバスというバスがありますが窓が割れているなど、バスそのものが古く停車場も始点と終点し記されていないといったことと、このようなこともあり、デリーメトロ以外の公共交通網の開発も近年注目されており、多筈さんも日印モノレール・LRTセミナーに参加しモノレールや路面電車といった新しい公共交通網の開発のプレゼンをお聞きになったそうです。こういった発展とは裏腹にデリーメトロで行ける範囲でも地方に行けば行くほど格差のようなものが見られるようになりある高架線の下で母子の死体が片づけられず放置してあるなど多くの課題が残されているように感じました。インドはかなり経済発展を遂げているとTVなどで聞いていましたが今回の話を聞いて自分が認識していた事実との相違があることがよくわかりました。インドでこのような状態であることと考えるとその他の途上国の実情は自分の考えよりより厳しいものになっているのではと思います、やはりその国の実態を知るためにはその国に行き自分の目で見て体験することが必要であると感じました。</p> <p>(GY5期生 奥野 優人)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2013/11/22	インターンシップ報告 実施先:NICE(国際ボランティア) タイ	杉平 ほのみさん	埼玉大学 教養学部 3年 (GY3期生)	<p>今回のインターンシップ報告会ではタイで国際ボランティア活動をされてきたというGY3期生の杉平ほのみさんのお話を伺いました。杉平さんはNICEのワークキャンプに参加されたそうです。ワークキャンプとは国際ボランティアプロジェクトの一つで、様々な国からボランティアに参加する人が集まり、一定期間活動を行うものだそうです。杉平さんはタイのRoywan Phan Pha Alternative School という週末に開かれる学校で活動をされました。この学校は子供たちが週末に自由に来られる林間学校のようなもので、杉平さんは子供に英語を教えたり折り紙を教えたりしたそうです。子供たちの折り紙を折って喜ぶ姿や純粋な笑顔に癒されたところにこしながらお話しして下さりました。他の日にはトイレやお風呂の建設作業、生ごみからコンポストを作る作業などをされたそうです。またタイでの生活についてもお話しされていました。杉平さんが寝泊まりしていたところでは、川の水や雨水をためたものを生活用水として使用していたそうです。私はそれを聞いて大丈夫なのかと不安に感じてしまいましたが、杉平さんによると慣れてしまえば意外と平気だったそうです。村の人にとってもそれは普通のことと、実際に生活して支援を受ける側の立場に立ってみることも必要だとおっしゃっていたのが印象的でした。他にも英語は完璧なツールではないと話されていました。村の人々に英語は通じなかったそうですが、ちょっとしたタイ語でコミュニケーションをとり楽しく会話することができたそうです。現地の言語を学ぶのはその土地の文化を学ぶくらい重要なことだと話されていました。私は今授業で開発援助について学んでいますが、日本でただ本を読んでいるだけではわからないことがたくさんあるということに気づかされました。現地に行っても実際にそこで暮らしてみなければ支援される側の視点に立つことはできないと思います。また先進国の基準が必ずしも世界の基準ではないということも胸に刻んでおくべきだと感じました。</p> <p style="text-align: right;">(GY5期生 小嶋早智)</p>
2013/11/15	インターンシップ報告 実施先:(株)秀文社 シンガポール	芳賀 佳奈子さん	埼玉大学 教養学部 3年 (GY3期生)	<p>今回のBBセミナーでは、(株)秀文社(学習塾)でシンガポールへのインターンシップを行ったGY3期生の芳賀 佳奈子さんのお話を聞くことができました。シンガポールについてはあまり知識がなかったのですが、交通や観光面での発展、一人当たりの所得が日本のそれよりも高いなどということを知り、とても勉強になりました。インターンシップの内容としては、早稲田アカデミーシンガポール校で校舎事務のお手伝いや生徒の見送り、電話対応、授業見学などということでした。生徒たちは日本の学校の帰国子女枠、現地の早稲田渋谷シンガポール校の合格を目標としていて、教育は少人数で、英語に力をいれているそうです。また、教育環境としては、生徒たちは素直で、様々な人種の生徒が高いレベルで学んでいて、寮もあり、そしてなにより夜間の治安が悪くないというところが、個人的にはとてもいい環境だなと思いました。また、シンガポールは知的労働者をいい条件で外国から雇っており、そのような面での使い分けがしっかりとしているというところに、教師など教える立場の人にとってもいい環境なのではないかと思いました。日本では、教師の給料や手当てをはじめとしてさまざまな議論があるが、シンガポールのように生徒にとっただけでなく教師にとってもいい環境があるというのは、将来的に見ても魅力的なことだと思った。芳賀さんはインターンシップを通して、世代や環境の違う人たちとのコミュニケーション能力の大切さを学んだとおっしゃっていましたが、グローバル化の中でそれは外せないことだなと思いました。私も将来にむけて今回学んだことを意識していきたいと思いました。</p> <p style="text-align: right;">(GY5期生 池田 圭)</p>
2013/11/11	インターンシップ報告 実施先:JICAベトナム事務所	寺田 悟士さん	埼玉大学 教養学部 3年 (GY3期生)	<p>今回のインターンシップ報告会では、JICAベトナム事務所にインターンした寺田さんのお話を聞きすることができました。ベトナム都市部では交通量が非常に多く、交通規制が大きな課題となっているそうです。寺田さん自身も、移動や道路を横切る際にも苦労したとおっしゃっていました。JICAベトナム事務所は交通インフラの改善をはかる事業を進めているそうですが、安全面に対する意識の低さ、市が事業費支払いを拒否するなど、様々な問題があるそうです。寺田さんは鉄道の優位性・収益性を高めることや、企業側の安全管理などが重要になってくるであろうとおっしゃっていました。ホーチミン市では、下水の93%が河川にそのまま流されて、水質汚濁を招いているそうです。JICAは下水の管理・処理能力を向上させるための事業を進めていますが、下水処理の重要性について住民の十分な理解が得られていないそうです。寺田さんは、河川のごみ拾いを通じて若い世代の意識改革をすることを提言したそうですが、すばらしいアイデアだと思いました。また、“持続可能な地域農業・バイオマス産業の融合”事業は人口増加や、自然災害による作物への打撃を見こして、食糧、燃料の安定供給の重要性に起因して立ち上げられたそうです。寺田さんがこの事業の試験農場に視察に訪れた際には、農村がそれほど貧しいとは感じなかったそうです。家電も大体そろっていると聞いて驚きました。しかし、省によっては貧困率が違い、まだまだ貧しい農村もあるという現実もわかりました。今回のセミナーに参加して、発展途中に起こる問題やその対策について学ぶことができました。また、寺田さんがおっしゃっていましたが、自身の積極性や、コミュニケーション能力がインターンシップにおいて重要であることを改めて感じる事ができました。今後活かしていきたいと思います。</p> <p style="text-align: right;">(GY5期生 金子 万次郎)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2013/11/8	<p>インターンシップ報告 実施先: プラネットファイナンスジャパン フィリピン</p>	小崎 隼さん	埼玉大学 経済学部 4年 (GY2期生)	<p>11月8日金曜日インターンシップ報告会は、GY二期生の小崎隼さん、フィリピンにてプラネットファイナンスジャパンで働き、マイクロファイナンスのお仕事に携わってきたというお話でした。BOPビジネス、つまり貧困層における上層部をターゲットにした金融を行っている会社とのことでした。貧困層の抱える問題として、金融サービスにアクセスできず、インフォーマルな親族などからの高利子のお金の貸借に依存してしまい、貧困から抜け出す道筋を失っているという点があります。そこで、少額、無担保によってお金を融資し、貧困から抜け出す手助けをするというビジネス、ということです。</p> <p>当初はフィリピンのミンダナオ島にて行われている農民的金融アクセス改善プロジェクトに参加する予定だったのですが、テロが起き、予定が狂ったそうです。そこで一週目はKMBIにおいてマイクロファイナンスプロダクトの作成の会議に出席したそうですが、フィリピンの現地語であるタガログ語で社員の方々が真剣に話されているため、質問もしにくつまらなかつたことと正直な感想を述べられていました。二週目はCARDにおいてマイクロファイナンスの研修を行ったそうです。KMBIとCARDの違いというのは、主にターゲットの種類だそうで、KMBIが一般向け、CARDは農民生向けとのことです。</p> <p>フィールドワークを行った際にセンターミーティングというものに立ち会ったそうです。センターミーティングとは融資を受ける人々とお金を貸す会社の人が立ち会う集会のようなものらしいです。優良顧客には個人でお金を借りる権利が与えられるようになりますが、そうでない段階ではグループ融資をします。つまり、連帯責任を負わせることで、より返済率を高めているとのこと(辻先生のお言葉によれば、プライベートなどの観点からそのような形態は無くなりつつあるとのことでした)。</p> <p>個人的に印象的だったのは、主婦の人が会社の人に泣きついたので見た、というお話です。センターミーティングは融資を受ける代表者全員が揃わねばならず、その日、一人欠けていたために融資の提供側が怒って帰ってしまったとのことでした。それでは融資を受けられず、貧困から抜け出すまたとない機会を失うこととなります。そこで、一人の主婦の方が、「お願い、帰らないで！」と泣きついたので見たとのことでした。センターミーティングでは会社がいかに素晴らしいものかを謳った歌を歌うという印象に残ります。貧困から抜け出すために低金利でお金を貸し出すというのはとても聞こえがいいものですが、そのプロセスは返済を完遂してもらうために時に厳しい条件をつきつけたり、意識操作のようなこともやったりしているのだ、そう感じ、いかに社会企業の存続がシビアなものか知らされたような心持です。</p> <p>経済学部生としても、社会企業に興味を持つ身としても、フィリピンの母親を持つ身としても今回のお話は大変興味深く面白く聞かせていただきました。ためになるお話でした。月並みですが、確実に感じるのは、一アジア人、一地球人として、貧困問題は個々人がより考えていくべきであるということであり、それはグローバル化、ひいてはグローバル化が叫ばれる今日には重要な課題だということです。</p> <p style="text-align: right;">(GY5期生 金城 花蓮)</p>
2013/10/28	<p>インターンシップ報告 実施先: NICE(海外ボランティア) タンザニア</p>	田中 健一さん	埼玉大学 経済学部 3年 (GY3期生)	<p>今回のBBセミナーでは田中健一さんによるタンザニアでの国際ボランティアの体験を聞くことができました。タンザニアという滅多に行くことのない地での貴重な体験を聞くことができ、とても感銘を受けました。また、自分自身もそういう地に一度は足を踏み入れてみたいと思えるBBセミナーでした。まず、田中さんが参加したNICEのタンザニアボランティアのNGO、UVIKIUTAについてです。UVIKIUTAは平和推進を基に教育の改善などを目指しており、田中さんが現地で行った活動としては苗木を植える作業から始まり、校舎の外壁のペイント、スワヒリ語の勉強、文化交流などだったそうです。また、現地のマサイの方はとても陽気な方が多く、すぐにもラフィキというfriendを指す語を使い馴染んでくれ、更に現地の子供に関してはとても人懐っこく、言語が通じずともサッカーなどで心を通わせることができました。その他にもボランティア前に起きた友人の窃盗事件や、マサイ族の中で多様化していく文化、日本文化を理解しておくことの重要性についてなど田中さんの体験から楽しくお話していただいたため、とても快然とした気分で見ることができました。最後に、このBBセミナーを通じて、私が最も印象に残ったのが“アメリカへの留学に限らず、何においても他人に伝えようとする姿勢、諦めない交渉力が大切である”という田中さんが言った言葉でした。経験数の少ない私にとってこの言葉はこの先生生きていく上でとても重要に感じられ強く記憶に刻印されました。楽しくもあり、非常に参考になるお話を聞くことができ本当に嬉しく思います。</p> <p style="text-align: right;">(GY5期生 西澤磨音)</p>
2013/10/25	<p>インターンシップ報告 実施先: v-shesh インド</p>	加瀬 智美さん 齋藤 芽吹さん	埼玉大学 経済学部 3年 " 教養学部 3年 (GY3期生)	<p>今回のBBセミナーではインドにあるv-sheshのインターンシップをなさった加瀬さんと齋藤さん、お二人のお話を聞くことができました。このv-sheshは社会企業という、利益を追求しつつも社会貢献を目標としている企業で、障害者の就労支援、障害に対する相談などを行っているそうです。お二人は企業のその社会貢献の一環としてインドの貧困層であるBOP層のアンケート活動を行いました。その活動中、お二人の伺ったご家庭には基本的な家電がそろっており、BOP層といってもインドは今や大きく発展しているのだと驚きました。しかし中には特定の家が無く、誰も住んでいない家に居座り家畜などを育てて暮らす人々もいて、発展はしても国内にはかなり大きな格差が存在しているのだと感じました。インドのこのような現状にたいして、v-sheshのような社会貢献を目的としている利益企業は重要な位置にいると思えます。私は今までインドに対して格差があると認識してはいましたが、それが具体的にどの程度ものなのか、どのような事情があるのかわかりませんでした。現地にいって直に途上国のことに触れられるインターンシップは大変意義があるものだと改めて感じ、今後の学習への刺激になりました。私も3、4年時にインターンシップに行けるようになりますが、それに向けて今から準備していこうと思います。</p> <p style="text-align: right;">(GY5期生 白澤佑起)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2013/10/21	インターンシップ報告 実施先: 株式会社ガリバー フィリピン	関塚 あゆ香さん	埼玉大学 教養学部 3年 (GY3期生)	<p>10月21日にGY3期生の関塚さんが海外インターンシップの報告会を行いました。関塚さんは以前から東南アジアに興味があったため、フィリピンにあるガリバーという輸出入・IT関連の会社を選んだそうです。そこでは様々な業務を行い、中でも得意であったフランス語の翻訳作業とホームページの特集記事のリサーチを中心に行っていたそうです。会社には現地の人だけでなく多くの日本人が勤務しているために公用語は英語であり、会社内では日本人とフィリピン人の相互理解のための日本語教室も開かれていたそうです。僕はこの話を聞き、グローバル企業というものがどのようなものなのかについての理解を深めることができました。関塚さんは、フィリピンでの仕事のことだけではなく、フィリピンの現地の状況についても多くのことを考察しており、スモーカーマウンテン、出稼ぎ、交通の渋滞、頻繁に起こる水害、ジブニーによる大気汚染など、様々な問題点を的確に指摘していました。現地に行かなくては分からないことを肌で実感できたということは、とても有益な体験だったのだと思います。今回の報告を聞いただけでも、僕の中のフィリピンに対するイメージは変わりました。国内からの視点だけでなく、現地に行き、現地の視点で考えることが大切であるということ学びました。</p> <p style="text-align: right;">(GY5期生 土屋健太)</p>
2013/10/15	インターンシップ報告 実施先: JACリクルートメント インドネシア	坂 亮太さん	埼玉大学 経済学部 4年 (GY2期生)	<p>今回のインターンシップ報告会では、JACリクルートメント/インドネシアにインターンした坂亮太さんのお話をお聞きすることができました。坂さんの行かれた首都ジャカルタには高層ビルが立ち並び、建設中の建物がいくつもあり、経済開発が急速に進んでいます。しかしながら、坂さんは、病院が少なかったり、子供が学校へ行かずにしごきをしていたりする現実もあり、貧困が解決されたわけではないとおっしゃっていました。また、このインターンシップを通して異文化理解がとても大切であることを実感したとおっしゃっていました。例えば、インドネシアの宗教はイスラム教で、礼拝の時間には仕事よりも礼拝を重視するため仕事が中断されることもあったそうです。私も外国と関わる上で異文化理解はとても重要だと思います。海外で仕事をするにしても、相手国の習慣や考えを認識し許容できなければ、必ず問題が生じると思います。坂さんのお話を聞いて、一見開発が進んでいるように見えても、貧困が存在している現状があること、グローバルな人材に必要なことを具体的に考えることができました。そして、海外で仕事をする苦勞ややりがいについても、私にとってとても新鮮なもので、自分も早く挑戦してみたいと思いました。私も英語を使って仕事がこなせるよう努力していきます。</p> <p style="text-align: right;">(GY5期生 吉村陸)</p>
2013/7/3	フィリピン・ミンダナオにおける 零細農民の金融アクセス改善事業 について	松浦わかこ 氏 アイオ・グバリア氏	プラネットファイナンス ジャパン	<p>今回のセミナーは、マイクロファイナンスコンサルタント、Io Martin Guballaさん、特定非営利活動法人プラネットファイナンスジャパンの松浦さん、お二人によるお話でした。まずGuballaさんは、零細農民への融資をフィリピンにおける現状と課題に焦点を当て、英語でお話しをしてくださいました。フィリピンにおける全体の労働力人口のうちの32%を占める農業従業者の経済状況は非常に厳しく、その大多数は貧困に陥っています。そのために農民の多くは融資を求め、国やNGO、協同組合などへのアクセスを図っています。しかし、フィリピンではマイクロファイナンス機関が欠如しているために、正常に融資が機能していません。そこで、Guballaさんは融資の機能の改善を図るための活動を行っているとのことでした。次に松浦さんは、同様に、フィリピンのミンダナオにおける零細農民の金融アクセス改善プロジェクトについて、お話しをしてくださいました。松浦さんは具体的に融資のプロジェクトの目標・目的、主な活動に焦点を当て、お話しをしてくださいました。お二方のお話は、日ごろ講義において学ぶ教科書などと違い、現場のお話であり、非常に勉強になることばかりでした。自分もこれからの勉強において、この経験を活かし、その国の具体的な問題に目を向け、その解決策を実際に考えられるような勉強をしていきたいと思いました。このようなお話を聞ける機会を持ってうれしく思います。</p> <p style="text-align: right;">(GY4期生 小林暉)</p>
2013/6/21	「イラク、東北、エジプト・・・」	松永秀樹 氏	JICAエジプト事務所長	<p>今回のBBセミナーは、国際協力機構(JICA)エジプト事務所長の松永秀樹さんに自己の体験に基づき開発援助についての話をさせていただきました。僕自身JICAの活動には興味を持っていて事前に松永さんが行動派熱血協力マンということを知っていたのでとても楽しみにしていました。一見したときは、本当に熱血マンという風に思いましたが話を聞いていると確かにと納得しました。災害後の支援の話をしていただき、災害後はさまざまな支援の受け手がバラバラであるのでそこを修復することが大切だということでした。僕は国際協力に興味があり将来少しでも発展途上国のためになればという思いはあったものの、それは復興支援というよりも貧困削減であり、発展途上国を少しでも豊かにしたいという思いでした。しかし、今回松永さんの話を聞いてこういった形の国際協力もあるのだと気づかされました。僕は、つい考え込んでしまうタイプでなかなか行動に移すことが出来ない性格なので松永さんを見習いどんどん行動できるようになりたいと思いました。</p> <p style="text-align: right;">(GY4期生 清水恵太)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2013/6/6	インターンシップ報告 三井住友建設株式会社 フィリピン	松浦幸太郎さん	埼玉大学 工学部 4年 (GY2期生)	<p>本日のセミナーでは、フィリピンへインターンシップに行った松浦さんのお話を伺いました。お話の内容は、フィリピンの基本データ、体験内容、松浦さんが感じたことについてでした。インターン先では、新人向け研修の体験と、建設の現場を視察されたそうです。私は松浦さんのお話を伺い、知識・技能の大切さと現場を知ることの重要性を痛感しました。私は現在、経営学や経済学の学習を行っていますが、今後の学習を通じて、自分の知識を増やしていくこと、学んだ知識を現実に応用できる技術の習得が非常に重要であると認識しました。どのように他人と違う優位性を持った人間になるべきか、もっと真剣に考えるべきだと感じました。今後の大学生活では、目的意識をしっかりと持ったうえで、真剣に学習を続けよう決めました。また、折に触れて現実世界に目を向けることも必要だと感じました。現場で働いている方とともに行動することでしかわからないことがあるので、自分の学んでいることがどう社会で役立っているのか知るためにも、インターンシップ制度を積極的に使っていこうと考えました。</p> <p>(GY4期生 白戸文規)</p>
2013/5/28	インターンシップ報告 NICE-Japan/ Volunteer Spirit Association タイ: 英語児童教育に従事する ワークキャンプ	田中こころさん	埼玉大学 教養学部 4年 (GY2期生)	<p>今回のBBセミナーではGY2期生の田中こころさんによる、タイでのワークキャンプの経験を聞くことができました。田中さんはタイで児童教育のボランティアに参加されたということで、子供たちとどのように触れ合うかなど、教育の大切さについて深く考えていることが伝わってきました。途上国の中でも発展しているイメージがあるタイですが、特に教育に力をいれているようで、英語教育については日本よりも早く取り組み始めるというのは驚きでした。また、今回田中さんとともに参加したボランティアのメンバーはアジア各国から集まった人たちで、ボランティアを通して様々な文化を持つ人たちと触れあえることも素晴らしい経験だと感じました。話の中で印象的だったのは、タイの子供たちがとても元気だったということです。直接触れ合うことで言葉が通じなくてもその明るさに元気をもらうことができて、そういったことがボランティアのモチベーションになっているのだと思いました。田中さんはなぜワークキャンプに参加したかについて、通常のインターンでは仕事の経験を得ることはできるが、本当に自分がやりたいことをするためにワークキャンプを選んだ、とおっしゃっていました。これはこの先自分がインターンを考えたときに必ず思い出す言葉だと思いますし、自分も後悔のない選択ができればいいなと思います。</p> <p>(GY4期生 津田賢汰)</p>
2013/5/24	インターンシップ報告 JICA(国際協力機構)スリランカ事務所	赤堀央樹さん	埼玉大学 教養学部 4年 (GY2期生)	<p>今回のBBセミナーはGY2期生の赤堀さんから、JICAスリランカ事務所へインターンシップに行った体験を聞くことができました。最初に青年海外協力隊(JOCV)についてのお話を聞きました。赤堀さんが訪れたJOCVのあるラージャンガナヤは、ボランティアとして活動するには非常に苛酷な地域であるらしく、私たちが想像するようなボランティアではなく、一般的な仕事以上のものであり、相当な責任を伴うものであったということでした。スリランカでは5年ほど前まで紛争があった地域でもあるらしく、そのような土地で心に傷を抱えた人々とコミュニケーションをとりながらボランティア活動をするのはとても大変なことなのだろうと感じるとともに、現地で実際にボランティア活動をしている人はよほどの熱意をもって活動しているのだろうなと感じました。次に平和構築についてのお話を聞きました。やはり紛争が終わったばかりということで、赤堀さんが見せてくださった写真の中には壊れてしまった教会や、地雷が埋められているために立ち入り禁止になっている場所があり、また、砲弾が貫通してその穴が修復されないで成長している様子の写真があり、そのときに赤堀さんが言った、このヤシの木は紛争の傷跡は消えないということの象徴にもなっていますね、という言葉がとても印象的でした。インターンシップは期間が短く、できることも限られているからこそ行く前にそこに行って自分は何がしたいかを決め、それを実行することが大事だと赤堀さんはおっしゃっていました。自分もインターンシップに行く際は、しっかりとやりたいこと、見たいものをあらかじめ決め、自分の成長につながるような体験をしてきたいと思いました。</p> <p>(GY4期生 千葉悠悟)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2013/4/26	大学生からの国際協力～学生NPO立ち上げ、民間企業経由、青年海外協力隊へ～	中野貴之氏(2008年埼玉大学理学部卒業)	JICA埼玉デスク 国際協力推進員	<p>今回は埼玉大学出身、現在はJICAで活躍なさっている中野さんがお話をしに来てくださいました。お話の内容は主に自己の体験した東ティモール支援についてでした。私自身は東ティモールについての知識はほぼゼロであっただけでなく、NPOなどの知識も胸を張って豊富だとは言えないのですごく新鮮なお話をたくさん聞いて良かったと感じています。具体的には、中野さんの所属していたサークルによる東ティモールのとある地域への文房具などの寄付、現地でもたまたま居合わせた日本人の方のお話、自分達の大きなプロジェクト、そして現地の学生のお話をさせていただきました。中野さんらは、学生では長期休み以外では東ティモールに行くことができないことを悩み、とある行動を起こしたそうです。これに私は衝撃を受けました。サークルでは補助金などが出ないので、自分たちのサークルをNPO法人に変えてしまったそうです。どれだけ大変なことであるのかを詳しく知っているほど私には知識はありませんが、相当な苦勞と覚悟があったはず。まず、行動を起こすことがどれくらい大切なことであるかを学びました。また、私事ですが、現地の学生のお話を聞き、現在開発について学んでいる教育学部生としてやはり開発途上国で教員をやるべきだと感じました。日本学生は教科書から文房具から、何から何まで勉強環境が整っているにも関わらず勉強意欲が欠けすぎていると改めて感じました。それに比べ、東ティモールの学生はものすごく意欲があると聞き、意欲がある学生が質の良い教育を受けられないことはやはり不当であると感じました。そこで私は、自分が質の良い授業を展開できる教員になり、東ティモールのような開発途上国で教員をしたいと今回強く感じました。</p> <p>(GY4期生 廣瀬直)</p>
2013/1/23	貧困問題と震災復興に取り組むリブの国ハイチ～専門家活動を通して感じたこと	結城亞津子氏	JICA 債権管理部 専門囑託 (元JICAハイチ派遣専門家)	<p>今回来てくださった結城さんのお話を聞いていて、自分は確かにハイチがどこにある国なのかを知っているだけであったり、少し前に地震があった国という認識しかありませんでした。ハイチには貧困問題は考えたことがなく、それに対する援助についても考えたことがありませんでした。また、ハイチに実際に行ってみないと分からないであろう事、例えば選挙の日に朝から集まり、お祭り騒ぎのようになるが、一票の重さを分かっているのか定かでないという事などを聞くことができ、とてもよかったですと思います。結城さんの専門家(援助調整)としての活動のお話を聞いて、そのような仕事があったのかと思いました。援助調整や仕事として情報収集の仕事が多く、それには情報収集能力だけでなく、高いレベルの語学力が必要だという事を聞いて大変な仕事なんだと思いました。他にも埼玉に教育研修来日したハイチの方の、教育意識に関する話や地震に関する話を聞くことができ、よかったです。今回聞くことのできた話をこれからの大学での勉強やその他の生活の中で活かしていきたいと思っています。</p> <p>(GY4期生 関田一磨)</p>
2012/12/17	インターンシップ報告 実施先: JICAインド事務所	林 和岐さん	埼玉大学 教養学部 4年 (GY1期生)	<p>今回のセミナーでは、教養学部4年生の林さんによるJICAインド事務所インターンシップについての報告がされた。</p> <p>まず、インターンシップ中に受けたインドに対する印象の紹介があった。インド人は本当にカレーをよく食べること、ターバンをつけているのは主にスィク教で、実際のところインド人の8割がヒンドゥ教、1割がイスラム教であり、あまりターバンをつけている人を見ないこと、インドで使われている英語が聞き取りづらいことなどがあった。私は、これらのことを聴いて、やはり文化というものは実際に現地に出向かないと理解できるものではないしそこでの困難つまりカルチャーショックをじかに感じることはできないのだなと思った。</p> <p>インターンシップでは、仕事よりも訪問活動が多かったようで、一つとして、ヤムナ川流域諸都市下水道処理場見学の話があった。インドでは、都市部に人口が密集しているが各家庭に浄化槽がなかったり、死体を川に流す習慣があったりと川の水質が汚染されている。一方で、ヒンドゥ教では沐浴の習慣があるなど、川の水によって健康に問題がある。そこで、ヤムナ川流域諸都市下水道処理場が建設されている。報告では、写真が多く使用されていて実際の現場がとてもわかりやすかった。印象に残ったのは、女性が現場にとても多く、その女性の子どもが現場で遊んでいる姿であった。日本では、女性が建設現場にいることはとてもまれでインドと日本の社会構造の違いがあることを感じた。また、下水道処理場のまわりはあまり整備されてはいないようであった。インターンシップの間で通った道路の写真もあり、とても大きくきれいな道路ではあまり車が走っていないのに対して、道路の整備がしっかりと進んでいないところほど渋滞が起こっているということが写っていた。この写真を見て、援助は、必ずしも現地の方々のニーズに合致しているとは限らず、本当のニーズを見極めることが肝心なことであるのだと感じた。</p> <p>インターンシップでの二つ目の活動として、ASHAでの活動が報告されていた。ASHAは幅広い活動をしていて、農業に関する活動、女性の地位向上への活動、教育関係の活動、医療に関する活動などを行っている。ASHAの活動報告のまとめで林さんが、ASHAは、持続可能な状態にする為の後継者の育成に主眼を置いているが、後継者となれる人が不足しているということ話を聞いた。私は、このことは、開発の現場においてキーワードになるようなことであると感じた。持続可能な状態にするための後継者の育成に主眼を置くということは、援助が終了したあとも、自力で生活を支えることができるようになり、地域自体が活性化することにつながるし、学んだ技術を応用することもいずれ可能になっていくのではないかと思う。後継者となれる人が不足していることは、大きな問題であり、援助をするときの課題になると考える。そのほかにも、林さんによって、援助における問題提起がなされていた。その中には、実際の現場でしかわからないような、文化的側面を持つ問題が多くあり、このことが援助を難しくし、発展の妨げにもなっているのだと考えた。開発途上国では、その国における文化的なことが社会にとっても強く反映されていることが多く、そのことが援助をより難しいものにする可能性があるということを改めて感じる事ができた。</p> <p>(GY4期生 石井有希)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2012/11/28	<p>インターンシップ報告</p> <p>実施先: JAC Recruitment (インドネシア)</p>	原 さつき さん	埼玉大学 経済学部 4年 (GY1期生)	<p>原さんは今回のセミナーで自身のインターンシップで得られたこと、また気付かされたことを一生懸命に伝えようという姿勢で臨んでいるのに私自身とても感心させられました。セミナーが始まる前にもお話を聞かせていただいたのですが、出来るだけこれから海外に留学やインターンシップに向かっていく私たちにとって役に立つことを一生懸命に話そうとしてくれていたのが印象的でした。私は原さんによるお話を聞いている中で、原さんの外国と関わりを持ちたい、新しいものを作り出したいという思いがひしひしと伝わってきました。GYプログラムとは別に、フィリピンにも自主的にインターンシップに行くなど積極的に行動し、自分にとって見習うべきことだなと感じさせられました。フィリピンでも、インドネシアのJACでのインターンシップでも、原さんは自身のイメージとの乖離に戸惑っていましたが、そんな状況の中でも自分を見つめ直し、外国で自分が目指すものを改めて考えていました。インドネシアの親日感情が経済に影響を及ぼしているというお話がありましたが、経済学部の自分にとって大変興味深いお話でした。また、インターン先で出会った人々のお話を聞くと、人との出会いの大切さを改めて噛み締めることが出来ました。</p> <p>(GY4期生 程原秀明)</p>
2012/11/19	<p>インターンシップ報告</p> <p>実施先: JICAベトナム事務所</p>	五十嵐祐樹さん	埼玉大学 経済学部 4年 (GY1期生)	<p>セミナーに参加する前に私はベトナムに対するイメージとして持っていたのは、異常なほどまで大量のバイクが街中を走っているイメージでした。あの交通量は事故が起こった時に危険だなと思うこともありましたが、今回その改善の取り組みに関することが聞けて勉強になりました。</p> <p>今回大きく二つのことに関して、まずは交通量が多いとのことでハノイ市内環状3号線とニャタン橋の工事、次に北西部地域農村部開発プロジェクトについてお話がありました。いろいろお話がありましたが、中でも特に気になったのは人材教育の面でした。道路を整備はもちろんですが、利用する人々に対するマナーの指導ですとか技術指導、援助が終わった後にも現地の人々自身で継続できるようにすることも重要であるとのことでした。指導の上ではベトナム人は勤勉ではありますが日本とは違い仕事の時間が終わったら終わりにして残業などはしないといったことや生活スタイルの違いも受け入れて支援を進める必要があるのだなと思いました。また、五十嵐さんは経済学部生ということで専門分野とは違った分野であったために少し戸惑いがあったようにお話しされていた印象を受けましたが、私にはそれ以前に専門的な知識がないので自分の得意な分野を持つことは大事であると再確認させられました。今回のセミナーでは、現地の状況をしっかり認識したうえでの支援と、支援の基礎となる学習する意欲の必要性を感じました。私も2年後か3年後にうまくいけばインターンシップに行くことになりませんが、そのために少しずつ準備していきたいです。</p> <p>(GY4期生 山形和史)</p>
2012/11/6	<p>インターンシップ報告</p> <p>実施先: V-shesh*(インド) *障害者等の就職を支援する社会 起業</p>	佐藤拓馬さん 藤岡春 さん	埼玉大学 教養学部 3年 (GY2期生)	<p>今回は、佐藤さんと藤岡さんのインドにあるV-SHESHでのインターンシップのお話を伺う事ができました。このV-SHESHは、利益追求に加え社会的問題を解決する事を目的とした社会起業家によって設立されたそうです。ここでは主に、障害者や弱い立場の人々に英語や計算、パソコンの使い方などを教えることによってソフトスキルの向上を図り、そして彼らに雇用の機会を提供していると知りました。良質の人材を送り出す点で、彼らのみならず社会全体にも良い影響をもたらし、まさに一石二鳥だと思いました。また、「なぜNGOという形態を取らないのか」というと、利益のために最善を尽くすから」というのを聞いて、シンプルで驚きました。確かに、充実したプランを提供しなければ顧客が減って経営者側も生き残れません。だから、対象となる顧客のことを考えたきめ細やかなサービス提供に全力を注ぐことができるのだと思いました。</p> <p>主な仕事の内容は、日本企業とコンタクトをとり交渉をして雇用先の拡大を試みることです。同じ日本人であるため、安心感や信頼感があるといった理由で任されたそうです。それでも、企業の人に上手く連絡が繋がらなかったこともあるそうで、苦労もしたのだと思いました。他には、Loyola Collegeでのテスト実施のお手伝いや、St. Louis Collegeでの絵本の読み聞かせのお手伝いなどをしたそうです。これらを通して、ハンディキャップを感じさせない元気に活動する素直な子供たちを見て、励まされ感動したそうです。私もその話を聞いたとき、その子供たちがイメージでき心が温かくなりました。そして、この経験を通して感じたことや学んだことは、仕事の大切さ、文化の違い、人との出会いの大切さであるとお二人は話してくれました。やはり、環境が異なる途上国でのインターンシップは想像以上に大変だったと思いますが、だからこそ得られるものも大きいのだとしみじみと伝わってきました。頭の中の理屈だけ終わらせるのではなく、肌で感じ本質的な部分の理解を深めていくという点で、途上国でのインターンシップは大変意義のあるものだと思います。</p> <p>私も、人との出会いを大切に、外国でのインターンシップの機会が得られたら、積極的に学んで十二分に吸収していきたいと思いました。</p> <p>(GY4期生 川嶋久美子)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2012/10/24	<p>インターンシップ報告</p> <p>実施先: 曙ブレーキ(インドネシア)</p>	帯津裕一 さん	埼玉大学 経済学部 3年 (GY2期生)	<p>今回のグローバルユースBBセミナーでは、帯津さんのインドネシアにある曙ブレーキグループ子会社(PT. Akebono Brake Astra Indonesia)でのインターンシップについてのお話を伺うことが出来ました。曙ブレーキさんは自動車や鉄道・航空機・オートバイなどで使われるディスクブレーキやドラムブレーキという部品やそれらに関連する諸部品の製造、だけでなく新製品の構想、開発も行なっているそうです。そのなかでも帯津さんは実際に人事課の一員として、実務を行い工場の視察、会議に参加して実際に発言するなど他の社員の人々と変わらずに仕事をしていらっしゃいました。その会社では実際に勤務している従業員数が2000人いる中で日本人社員はわずか11人しかいなかったそうです。そのような周りに日本人が少ない中でも帯津さんは実際に会社を改善するために具体的な提案を考えて発表するということがあったとおっしゃっていました。インターンシップを終えた帯津さんが全体から感じた事としておっしゃっていたことがありました。</p> <p>「専門的な知識は前提としては必要なく、その仕事を行う中で身につければいいのだと感じました。むしろ私がこのインターンシップにおいて、海外で仕事をする中で一番大事、必要だと思ったのは相手とコミュニケーションを取るための言語能力、そして一緒に仕事をする国・相手の文化・習慣を尊重し、理解することだと思いました。」</p> <p>将来自分が留学・海外勤務など日本の外でいろいろな物事に挑戦する際には、まず専門性というものが大事だと思っていましたが、実際にこのお話を聞いてまず自分に必要なのは自分の意見を考え発表する力、そしてそれを正しく異言語でも伝える能力、そして行った先の国についての知識や教養でありそれを一生懸命学んで行かなければならないと決心しました。</p> <p>(GY4期生 中村未来王)</p>
2012/10/17	<p>インターンシップ報告</p> <p>実施先: 日本工営(ベトナム) 全国水環境管理能力向上プロジェクト</p>	栗原菜月 さん	埼玉大学 経済学部 4年 (GY1期生)	<p>今回の栗原さんのベトナムでのインターンシップ報告では、私がまだ知らない発展途上国の現状を知ることができた。栗原さんは日本工営株式会社というコンサルタント会社のベトナム国全国水環境管理能力向上プロジェクトに参加されたそうで、プロジェクトでの発見や難しさなどたくさんのお話を伺うことができた。</p> <p>まず、異文化という点に関して実際に体験した人のお話はとても興味深かった。ベトナムは社会主義国であるから国営企業が多いということは知っていたが、この事実が水質汚染対策の取り組みに関係してくるということまでは考えつかなかった。</p> <p>また仕事に対する考え方も違うそうで、シエスタに代表されるような異なる価値観や時間の使い方も実際に一緒に仕事をするとなると大変なようである。仕事の報告では考えさせられることがたくさんあった。栗原さんが参加されたのは水環境における人材育成や能力の向上を目的とするプロジェクトだと聞いて、私は水質調査や下水道建設などの指導を行うようなイメージを持った。しかしそのプロジェクトの中には水質汚染情報を管理するためのパソコンソフトウェアの使い方の指導という情報分野の指導もあり、一つの問題を解決するにも様々な分野の指導を行うことの必要性があることに気付くことができた。栗原さんが紹介なさっていた写真の中には、排水パイプがむき出しの工場の写真があり、そのパイプのすぐそばには川が流れていた。排水が川に流れていることは明らかであり、プロジェクトに取り組むなかでもいまだにこのような状況が残っていることに、問題解決への難しさを感じた。</p> <p>そして栗原さんは最後に、海外で働くために必要だと感じたことについて話してくださった。一つめに専門的な知識。異文化をもつ人々と一緒に仕事をしていくためには、その分野での専門的な知識を持っていることが信頼につながるそうだ。二つめに協調性。異文化の中で仕事をするには柔軟性やコミュニケーション能力は一層必要だと私も思う。三つめに自己管理能力。海外で働くということはそれなりのスキルをもっているということであるから、仕事も任せられる部分が多いらしい。はじめの専門的知識は大学で徐々に学んでいくとして、他の二つは今からでも伸ばしていける部分だと思うので、今から努力をしていきたい。</p> <p>栗原さんのお話から、発展途上国の現状を垣間見ることができた。まだ先の話ではあるが、留学、インターンシップ、そして社会に出た後のためにも、実際に体験した人から、発展途上国の現状を聞く機会を持ちたいと思った。そして自分でも発展途上国の現状について日々考えていこうと思う。</p> <p>(GY4期生 教養学部)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2012/7/2	プラネットファイナンスジャパンの活動について -マイクロファイナンスをすべての国に-	田中和夫 氏 広瀬大地 氏	NPO法人プラネットファイナンスジャパン	<p>今回のBBSではプラネットファイナンスという団体の方のお話を伺った。プラネットファイナンスは途上国のマイクロファイナンスを支援する国際NGOである。マイクロファイナンスとは貧困者や低所得者向けの小規模金融のことであり、金融サービスにアクセスできないそのような人々に資金を提供するようなサービスのことであり、今回の機会ではプラネットファイナンスの活動のことがよくよく、マイクロファイナンスの活動についても多くお聞きすることが出来た。</p> <p>日本ではほとんどの人が何かしらの企業に雇われ、給料を得ているが、世界の7割ほどの人々はSelf-employment(自営業)であり、自分の稼ぎがそのまま所得になる。しかし、売れるものの需要、数量によって収入は安定せず、貧困に悩まされている人々であると生活に困ってしまうことが多々ある。そんな人々を支援するのがマイクロファイナンスであり、そのマイクロファイナンスを支援するのがプラネットファイナンスということである。</p> <p>また、プラネットファイナンスの活動を一部説明していただいた。活動内容の一例として、パキスタンにおける新商品開発及び職員育成のニーズの調査を9か月にわたって行い、技術支援のニーズを特定し、人材育成の研修ニーズに基づいた研修カリキュラムを提案するなどの活動を行っていたことを挙げる。また、プラネットファイナンスの理事長であるジャック・アタリ氏が日本の大学で講義を行ったり、UMPF(大学生・社会人に向けたプラネットファイナンスの研修プログラム)を行ったり、ミンダナオ島における零細農民救済プロジェクトを行ったとのことである。</p> <p>また、世界各国で行っている活動によってつくられたグローバルなネットワークと、マイクロファイナンスの知見を活かし、2011年に起きた東日本大震災の被災地支援活動も実施しているとのことである。アメリカの緊急援助団体メーシーコープと協力して小規模事業者を支援したり、フランス財団及びフランスロシュフォル商工会議所などより得た支援により三陸のカキ産地の復興支援を行ったり、多くの活動を行っている。今後は南アフリカの新興農家の資金ニーズを調査する予定であるなど、世界に向けて活発に支援や活動を行っている団体である。</p> <p>マイクロファイナンスについて、学校で受けている授業で知る機会があったが、グラミン銀行など有名なものしか知らなかったもので、そのようなマイクロファイナンスを支援するNGOがあるということを知ることが出来て良かった。また、多くの分野で活動しており、現状を良く知っているであろう団体の事務局長という重要な立場にいる人から話を聞くことが出来る数少ない機会に享受することが出来てうれしく思う。</p> <p>プラネットファイナンスが行っている活動の中で一番気にかかったのは、ミンダナオ島における零細農民の金融アクセス改善プロジェクトである。ミンダナオ島について他の授業で聞いたことがあるためだ。この地域では職を探すことが難しいらしく、離れた地域に出稼ぎに行く子供が親に仕送りをしてなんとか生活を送っているという世帯もあるという。そのように貧困に悩まされている零細農民のニーズを設計したり、家計管理のための金融リテラシートレーニングを行ったりすることで、彼らのような人々でも子供と離れて暮らすことなく生活が出来るようになるとういと感じた。</p> <p>また、このようなNGOの活動は日本国内ではなく他の発展途上国で行われるものと思っていたので、東日本大震災の支援を行っているということに少し驚いた。しかし、世界各国と繋がるような支援を行っている団体だからこそ、他国と日本の中継を担うことができるのだと納得した。様々な国が日本のために義捐金を送ってくれたことはもちろん知っていたが、このようにNGO団体の活動へ支援金を集めることによるような日本への支援も行ってきていたのだと知ることが出来て良かったと思う。今回は田中さん、広瀬さんに様々なお話をさせていただき、またその話を聞くことが出来て大変勉強になった。自分でももっと詳しくマイクロファイナンスのこと、マイクロファイナンスを支援している人々のことを調べてみようと感じた。</p> <p style="text-align: right;">(GY3期生: 加瀬智美)</p> <p>今回のBBセミナーでは、NPO法人プラネットファイナンスジャパンの活動について、このNPO法人の事務局長である田中さんと広瀬さんからお話を伺いました。プラネットファイナンスの事業は、主にマイクロファイナンス機関の能力強化の支援です。マイクロファイナンスについて、これまでの本学の授業でも取り上げられたこともあり、自分も大まかには理解していました。そして、今回パキスタンやフィリピンでプロジェクトを行っているという当事者であるお2人の、いわば現場の声を聞いて、マイクロファイナンスについての理解をより深めることができたと同時に、少しではあるもののマイクロファイナンスを身近なものとして、捉えられたように感じた、というのが今回の自分の率直な感想です。また、アメリカやフランスの団体がプラネットジャパンを通じて、東日本大震災の被災地の復興支援を行っているということを知った時には、暖かい気持ちになりました。</p> <p style="text-align: right;">(GY3期生: 佐藤智亜樹)</p>



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2012/6/27	インターンシップ報告 ～ ワシントンで見たこと、感じた事～	若林祐貴子 さん	埼玉大学 教養学部 4年 (GY1期生)	<p>この度、講演して下さった方が参加されたインターンシップは、教育の側面が強く、本当に有意義な経験をされたのだと感じました。特に、社会で活躍するリーダー達や世界中から集まる優秀な学生達の交流というプログラムにとっても魅力を感じ、私もできれば参加したいものだと思っております。若林先輩の話で最も印象に残ったのは、異国の地でも立派に活躍している日本人が多くいるという話でした。私はGYプログラムの学生として、今まで多くの米国式教育、欧米の価値観に触れる機会が多々ありました。誰も感じることもかもしれませんが、私はその中で日本式の物の考え方にむしろ違和感を抱くようになり、日本人はこれからの国際社会を生き抜いていけるのか疑問を抱くようになりました。しかし、若林先輩の話の通り、米国でも頭角を現している日本人も多くいることは事実です。他の人種にはない日本人の強さも必ずあると思っております。それが具体的に何なのかは不明瞭ですが、若林先輩のように外国に出てみて気づかされる事もあるのだと思っております。</p> <p>(GY3期生: 守屋邦昭)</p> <p>今回は、GY1期生の若林さんからインターンのお話を伺いました。若林さんのお話を聞いて、私は多くの外国人と接することの重要性を実感しました。若林さんは外国の人と接する中で、他の国の人たちのモチベーションの高さにとても刺激を受けたそうです。「日本の学生は内向きだ」というお話を伺ったという話や、若林さんの感じた「日本大丈夫?」というお話を聞きながら、「このまま日本は世界においていかれてしまうのかな」ととても不安になりました。「英語ができる日本人より、日本語ができる外国人を採用したいと考えている企業がある」というお話を聞いたとき、私たち学生はこのまま現状に甘えてはいけなくて実感しました。私はGY生の1人として、これから留学やインターンシップに行きます。与えてもらったこの機会を絶対に無駄にせず、将来日本に、また世界に貢献できる1人になりたいです。</p> <p>(GY3期生: 杉平ほのみ)</p>
2012/6/7	国際NGOプランジャパンの活動について-途上国の子どもと築く未来-	佐藤活朗 氏	公益財団法人プランジャパン	<p>今回のBBセミナーでは、国際NGOプランジャパンの活動についてお話を頂きました。私は、開発途上国への支援と聞くと、どうしても学校建設などのハード面の支援が真っ先に思い浮かべられ、その後についてはあまり関心がありませんでした。しかし、「人々の権利と尊厳が守られ、すべての子どもたちが能力を最大限に発揮できる世界を実現する。」との目標掲げるプランはその実現のため、むしろ地域住民、特に子どもたちに対する、トレーニングや習慣改善などのソフト面での支援を重視しているように思いました。たしかに、地域の自立には、短期間の支援と箱物の提供だけでは不十分で、継続的な地域参加型の支援が必要であると思いました。</p> <p>(GY3期生: 長谷部和彦)</p>
2012/4/26	平和構築について考える ～JICAスリランカ事務所でのインターンシップを終えて～	鈴木友里 さん	埼玉大学 教養学部 4年 (GY1期生)	<p>宮尾先生がおっしゃっていたように、私も平和構築を漠然と、大きい機関が取り組むもので、私個人ではどうにもならないものだととらえていた。そのため鈴木さんの「平和構築は地に足をつけた活動の中で行われる」という言葉はより印象的で、これから私が学ぼうとしている開発援助についても同じことが言えるのではないかと思った。</p> <p>また、灌漑施設が整備されていく段階の順を追った写真を見て、実際は途上国や途上国の発展は想像よりはるかに身近にあるもののように感じた。私も世界で起こっている問題を身近な問題だと自分で感じ、自分のすべきことを見つけるために、途上国を含め多くの国を訪れたいと思う。</p> <p>(GY3期生: 諏訪茜)</p>
2012/1/18	マーシャルってどんな国 ～ごみ処理事業から分かること～	大塚康治 氏	JICA海外シニアボランティア	<p>私が最も印象深かったのは、日本とマーシャルのゴミ組成比較です。マーシャルは国内に産業がないので、日用品のほとんどを海外からの輸入に頼っています。さらにごみ処理設備が不十分なため、包装紙などのごみが次々と海へ投げ捨てられているそうです。輸入品の値段が高いため現地の人が日用品を買うことが出来ないという現実にも衝撃を受けました。また、草木がごみに占める割合が最も高く、次にその他のカテゴリーが続いており、ごみ分別の曖昧さ、意識の低さを感じました。</p> <p>一方、日本は、残飯の占める割合が40パーセントにもなっており、日本がいかに裕福で、食べ物を粗末にしているかを考えさせられました。このような途上国が抱える問題は、先進国の影響によるものがほとんどだと思います。途上国のガバナンスを確立させ、現地の人々が最低限の生活を送れるように援助し、自立させることが先進国の責任だと感じました。</p> <p>(GY3期生: 芳賀佳奈子)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2012/1/10	学生のうちにすべきこと ～一つ、途上国ネパールに行って 感じること～	塚田太一 氏 東 敬介 氏 高 頭慧 氏 鈴木良壽 氏	埼玉大学 教育学部 3年	<p>今回は、ネパールに行った複数の学生の方々からそこで体験して、感じたことについて聞くことができました。同じ学生という目線だったので外国・異文化というものをより身近に感じられました。みなさんのお話を伺って、何か挑戦するとき必ずしも決まった理由が必要なわけではないということを感じました。そして失敗を恐れず、最初の一を踏み出すことが大事だということがわかりました。様々なことに挑戦したり体験したりすることは学生のうちにしかできないことであり、こういった経験は一生の宝になると思います。同じ国へ行って同じような体験をしていても感じることは人それぞれであり、受け止め方も違います。今日伺ったお話を参考に私も自分にとっての「学生のうちにすべきこと」を考えたいと思いました。</p> <p>(GY3期生: 齋藤芽吹)</p> <p>今回のBBセミナーのテーマは、「学生のうちにすべきこと ～一つ、途上国ネパールに行って感じること～」でした。教育学部の塚田太一さんをはじめとした七人の方が、各々のネパール体験記を話しました。自分は、チョフさんの講演会を聞いたことがあるのでネパールの現状はあらかじめ知っていましたが、各々の皆さんの体験してきたことというのはチョフさんのそれとは違っていました。お話しくださった皆さん全員に共通していたことは、「動き出さなければ何も変わらない」ということです。これを胸に刻んでこれから生きていきたいです。</p> <p>(GY3期生: 田中健一)</p>
2011/12/14	JANICと日本のNGOの活動	富野岳士 氏	国際協力NGOセンター (JANIC)	<p>今回は、国際協力NGOセンターのほうで活躍されている富野さんのほうから主にJANICの活動内容についてのお話を伺いました。今回の話を聞いて感じたことは、次の二点です。</p> <p>一つは、日本のNGOの利点実践の現場でフルに生かされているのだなと実感できたことです。今年の3.11の地震の際に、国境なき医師団日本などのNGOが被災地の支援救助のために迅速にかつ柔軟に対応したということで、日ごろから国内外問わず広く対応してきた経験と事前の資金源がうまく機能しているなど感じました。</p> <p>二つ目としては、NGOの資金面でのご事情があります。日本のNGOの中には1億円を超える寄付金を受けている団体もあるというお話でしたが、海外と比べるとまだまだ十分に豊かに寄付金があるというわけではないので、もっと日本国内に寄付の習慣が広く社会に浸透していくことが不可欠であるという風に感じました。</p> <p>(GY3期生: 菊地匠)</p>
2011/11/28	グラミン銀行でのインターンシップ の経験を通して	小口毅史 さん	埼玉大学 経済学部 3年 (GY1期生)	<p>バングラデッシュというと、人口が一億人を超えていて、イスラム教であり、発展途上国だという認識がありました。実際にその通りなのですが、バングラデッシュの人たちがどのくらいの経済で生活している、そこにグラミン銀行がどう関わっているのかよくわかりませんでした。というよりむしろ、僕はグラミン銀行すら知りませんでした。グラミン銀行は主に農村の人たちに対して低金利無担保で融資を行っているらしく、バングラデッシュ全体の経済発展の一端を担っているらしいです。僕は最初、経済的に厳しい状況にある人たちは融資を受けるのは難しいのではないかと考えていたのですが、グラミン銀行はそんな人たちでも融資を行っているので驚きました。グラミン銀行も一企業なので利益を追求しなければならないと思うのですが、それを一番にするのではなく、経済的弱者を助けるという理念を持っているところが素晴らしいと思います。</p> <p>僕は始め小口さんはGYのインターンシップでグラミン銀行に行ったのだと思っていたのですが、実際は自分で申し込んでインターンシップに行ったと聞いて驚きました。僕も小口さんのような行動力をもって挑戦していきたいと思います。</p> <p>(GY3期生: 多菅大暉)</p>
2011/11/11	日本のユネスコスクール・ネットワークの展開とESD	小林亮 氏	玉川大学教育学部	<p>ユネスコスクールは、教育の国際協力による平和実現を図り、1935年に設立された共同体である。日本においては現在308もの学校が加盟し、4つの基本的学習テーマに沿った教育を実践している。近年重点が置かれているのは、EFA(万人のための教育)とESD(持続発展教育)である。前者は識字率と教育の普及、後者は学際的にあらゆる面から持続可能な社会を築く人材の育成を目的とする。具体的には、日韓合同で「米」を通じアジア太平洋地域での多文化理解・交流を図る(RICE Project)などの活動が実践されている。また、今後の活動においては、地域や国家や生徒と学校を繋ぐ「仲介者」の育成が課題である。以上のセミナーから、私は教育の重要性を非常に実感した。基本的教養を身に付け、独自の判断が行えなければ、真の幸福は得られないと思う。</p> <p>(GY3期生: 関塚あゆ香)</p>

開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2011/11/7	UNDPの役割と活動	西郡俊哉 氏	UNDP東京事務所	私は今までUNDPという名称は聞いたことはあっても、どのような機関で、何をしているのか、はっきりとはわかっていませんでした。けれど、講師の方に分かりやすく説明していただいたおかげで、国連の中の組織の一つであること、開発支援を総合的に行っていく世界一のネットワークを持つ機関であるということを知ることができました。一番興味深かったことは、貧困を削減するための活動のみならず、その国の民主制を守る活動、危機予防や復興、環境を守るため持続可能なエネルギーの開発もするなど、幅広い分野で活動をしていることです。UNDPがあるからこそ、他の組織もスムーズに活動できるのだということもよく理解することができたいい機会でした。  (GY3期生:田中里佳子)
2011/10/17	ニジュールでの活動から考える、学校ってなんだろう	山田真依子 氏	海外青年協力隊OB	私がニジュールの現状を聞いて驚いたことは、女子の結婚する年齢層です。日本では恋愛したり、自分の好きなことができる時期であるのに、親が決めた相手と結婚しなければならないのです。それで幸せになれるのならよいが、必ずしも幸せにはなりえないと思います。やはり将来への選択肢を広げてあげることが子供たちにとって重要で、それには教育改革をすることが大事だと思います。職能制を採用するなどの対策を講じ、本当に学びたいと思っている子供たちだけでもちゃんと学べる環境を作っていくべきです。そのように将来への選択肢を増やしていくことで、結婚しか考えていない子供たちにも学習意欲を持たせることができると思いました。  (GY3期生:寺田悟士)
2011/7/5	気候変動対策支援 - ベトナムの事例 -	森睦也 氏	国際協力機構 企画部次長	セミナーの感想は2011年10月17日開催分より掲載を開始しました。
2011/6/30	貧困者の市場への参加と援助協力による支援—西アフリカ仏語圏の事例から—	上江洲佐代子 氏	政策研究大学院大学 開発フォーラム・プロジェクト 研究助手	
2011/6/17	地熱発電の開発と国際協力	金子正彦 氏	西日本技術開発株式会社 執行役員兼東京事務所長	
2011/4/26	もしも埼玉大学の学生がネパールのボランティアで学んだら	古谷祐輔 氏	教育学部4年生	
2010/1/24	政府開発援助(ODA) ～現在の課題、今後の展望～	植野篤志 氏	外務省 国際協力局政策課長	
2011/1/19	情報通信技術(ICT)を活用した農村 貧困削減の取り組み -バングラデ シュのケース-	Ashir Ahmed 氏	九州大学 高等研究院 社会情報基盤構築 特別准 教授	
2010/12/13	An Introduction to Pakistan	Qazi Asif Nawaz 氏	埼玉大学 理工学研究科	
2010/11/24	バングラデシュ初等理数科教育支 援の現場から	二宮裕之 氏	埼玉大学 教育学部数学教育 講座 准教授	
2010/11/8	母なる港・モロッコ -シニア海外ボランティアの2年間	樋口暁子 氏	元蓮田市長	
2010/10/27	ODAにおける漁村開発支援につい て	寺島裕晃 氏	アイ・シー・ネット株式会社 代表取締役	
2010/10/15	青年海外協力隊という選択 -ウズベキスタンでの活動を例に-	新川美佐絵 氏	JICA埼玉デスク 国際協力 推進員	
2011/6/21	Student life in China and in the USA	Bizhan Zhumagali氏 Wang Shaoting氏	University of Maryland, USA Wuhan University, China	
2010/6/7	アジア開発銀行の組織と業務の動 向について	日向俊一 氏	アジア開発銀行駐日代表事 務所 次席	
				セミナーの感想は2011年10月17日開催分より掲載を開始しました。



開催日	講演タイトル	講演者	所属等	セミナーの感想(GY生)
2010/5/20	アフガニスタンは『破綻国家』か？	福田幸正 氏	(財)国際通貨研究所 開発調査部 主任研究員	
2010/5/10	私の国際協力 -ブラジルでの経験から-	磯田昇 氏	JICA地球ひろば 埼玉県地域国際協力サポーター	
2010/4/21	浦和レッズの草の根国際交流	白戸秀和 氏	浦和レッズ 社長補佐	
2010/4/15	世界銀行の過去、現在、未来	小川和子 氏	世界銀行 ヨーロッパ・中央アジア地域局 Senior Country Officer	

|

|

























































































